東海道名所圖會

五

内閣文庫

番號	和	8664
冊數	6（5）	
函號	172	271

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

東海道名所圖會巻之五

目録

○吉原
冨士山
[illegible]書　勅撰古詠　伊勢物語　更科の記　俳諧古句　曽我夜討画
都良香冨士記　義楚六帖　羅山丙辰紀行　十六夜日記　神社考
万葉古詠　史記　徂徠文集　曙の記　冨士賦
焦氏筆乘　南郭文集　為村卿紀行　冨士圖
竹取物語　朝鮮人詩稿　琉球人詩稿　頼朝卿牧狩圖
冨士鳴澤　田子浦　冨士沼　左不二
元吉原　鐙石　手児呼阪　要石　芝瀬川
○原
白隠禪師蹟　松蔭寺　白隠行状畧記　白隠語録
師歯迫山　興國寺古城　阿野禪師古跡　阿野細江
井出館舊趾　竹下道　横走関　愛鷹山
足柄関　足柄神祠　新羅三郎秘曲傳授　千本松原　六代御前墓
冨士人穴　八重山　丸子神祠　亀鶴墳
○沼津
車返　冨士隠

黄瀬川
千貫樋
別宮八社　神池　馬場　例祭圖
興小島
風越臺
本社　藥師堂
箱根温泉
曽我兄弟墳　虎墳　庚申墳
底倉湯
湯本湯
早雲寺
豊太閤陣所

宗祇終焉地
駿豆両國堺
辨天臺　鳥部屋
走湯山　隨身門　神馬厩
冨士見平
○箱根
末社　親鸞聖人堂　生死池　元函河原
大師堂　曽我兄弟　頼朝状　多田満仲塔
蘆之湯
宮下湯
温泉記
佛殿　宗祇墳　北条氏墳
石橋山

頼朝義經初對面陣所
○三嶋
鳥居　藥師堂
熱海温泉
山中古城
芦根湖水
行者堂　虎兄倉
小地獄
堂嶌湯
湯本名品挽物店圖
早溪
○小田原
外郎店

三嶌神社　本社　末社
寶蔵　二天門
古々井杜　三層塔　神供所
豆相両國堺
箱根權現社
獅子巖　御供所
氣賀湯
名所四十九箇所　藥師之池　十二光佛石像
塔澤湯　勝麗山　玉簾橋
淨泰寺
小田原北條

酒勾川
藤巻寺
日蔭馬場
鴫立庵　鴫立碑
三社權現
馬入川
奥不動　鎮守
二王門　奥院　石尊社

小餘綾磯
鹿松
小餘綾杜
西行上人像　詠草　什物　虎御前像
花水橋
十間阪
白山　二重瀧　経藏　末社

曽我里
吾妻山
切通地蔵
○大磯
○平塚
大山寺
神輿舎　良弁瀧　鐘樓　新瀧

川勾神社
相模國府
鴫立澤
虎子石
八幡宮
前不動　行者堂　山門　大瀧

するがの吉原驛より
ふじの山を眺むれバ
西の方ハ足柄のたる
うミ長く續きたり
生出るすがたハ天を
異國にもなかりし
名た名山にて
おそれく尊くぞ
おぼゆる

冨士山
扶桑第一山
車此對屏顔
白雪初陽映
崚嶒霄漢間
蕉中常

天津日のてらせるよもの國中に
たぐひあらじといふふじの祢
洛 伴蒿蹊

竹取翁
赫奕姫

源順が竹取物語ハ寶樓閣經に比しく書れしと安仲なるべし宣ひたり竹氏の翁が娘ハ美顔香肌乃緊人なりしで後宮に入内せしを厭ひて去容月山岩笠といふ者うたくしも志れみもたて霊ひを志だ不死の薬なおげて上天しのひあれど夫の子なる縁といへり王元之が竹樓記に琴を鼓するに宜し琴調和暢と又咸平二年八月十五日に記をかれしも月夜を賞しけるが記に赫奕姫を竹樓記に書遺されしもたひあるゝ憾あることをや

原まで三里六町此驛は延宝八年八月
六日暴風烈しく潮水満上り津濤して家屋漂流し人
馬溺死ものも多し天和二年の春此地に移れ

冨士山　四海無雙の名山にして駿河甲斐相摸三國に蟠るといへども駿州
冨士郡にあれバ冨士山と号し駿河の冨士ともいふ

本朝文粋　冨士山記　都良香

冨士山者。在駿河國。峯如削成。直聳屬天。其高
不可測。歴覧史籍所記。未有高於此山者也。其
聳峯欝起。見在天際。臨瞰海中。觀其靈基所盤
連亘数千里間。行旅之人。経歴数日。乃過其下
去之顧望。猶在山下。蓋神仙之所遊萃也。承和
年中。従山峯落来珠玉。玉有小孔。蓋是仙簾之
貫珠也。又貞観十七年十一月五日。吏民仍
舊致祭。日加午天甚美晴。仰観山峯有白衣美
女二人。雙舞山巓上。去巓一尺餘。土人共見古
老傳云。山名冨士。取郡名也。山有神。名淺間大
神。此山高極雲表。不知幾丈。頂上有平地。廣一
許里。其頂中央窪下。體如炊甑。甑底有神池。池
中有大石。石體驚奇。宛如蹲虎。亦其甑中常有
氣蒸出。其色純青。窺其甑底。如湯沸騰。其在遠
望者。常見烟火。亦其頂上匝池生竹。青紺柔慄
宿雪。春夏不消。山腰以下生小松。腹以上無復
生木。白沙成山。其攀登者止腹下。不得達上。以
白沙流下也。相傳昔有役居士。得登其頂。後攀
登者皆點額於腹下。有大泉出自腹下。遂成大
河。其流寒暑水旱無有盈縮。山東脚下有小山。
土俗謂之新山。本平地也。延暦廿一年三月。雲
霧晦冥。十日而後成山。蓋神造也。

望不盡山歌并短歌　山部宿祢赤人

万葉
○天地之分時従神左備手高貴寸駿河有布士能高
嶺乎天原振放見者度日之陰毛隠比照月乃光毛
不見白雲母伊去波伐加利時自久曽雪者落家留
語告言繼将往不盡能高嶺者

返歌

同
○田児之浦従打出而見者真白衣不盡能高嶺尓雪
波零家留　新古今 白妙之

詠不盡山歌并短歌　高橋蟲麻呂

同
○奈麻余美乃甲斐乃國打縁流駿河能國與巳知其
智乃國之三中従出之有不盡能高嶺者天雲毛伊
去波伐加利飛鳥母翔毛不上燎火乎雪以滅落雪
乎火用消通都言不得名不知靈母座神香聞石花
海跡名付而有毛彼山之堤有海曽不盡河跡人之

渡毛其山之水乃當烏日本之山跡國乃鎮十方座
神可聞寶十方成者山可聞駿河有不盡能高峯者
雖見不飽香聞

返歌

同 不盡嶺尓零置雪者六月十五日消者其夜布里家利

同 布士能嶺乎高見恐見天雲毛伊去羽斤田菜引物緒

同 吾妹子尓相縁乎無駿河有不盡乃高嶺之燒管香将有

同 阿敝良久波多麻能乎思家也古布良久波布自乃多可
禰尓布流由伎奈須毛

同 妹之名毛吾名毛立者惜社布仕能高嶺燎乍渡

同 安麻乃波良不自能之婆夜麻己能久禮能等伎由
都利奈波阿波受可母安良牟不盡能禰乃伊夜等
保奈我伎夜麻治乎毛伊母我理登倍婆氣尓餘婆
受吉奴

同 可須美為流布時能夜麻備尓和我伎奈波伊
豆知武吉氏加伊毛我奈氣可牟

拾遺 千早振神も思ひはわれらしや年まで婦しのけふりあゐあ 人丸

詞花 月よしに山路のこの時雨し婦しの高根の雪そそめける 大江嘉言

古今 君てへハ見まれ見すまれ婦しのねのめつらしけなくもゆる我戀 藤原忠行

同 婦しのねのならぬ思ひにもえハもえ神たにけたぬむなし煙を 紀のめのと

同 人しれぬ思ひハつねにするかなるふしの山こそわか身之あれ 讀人知らず

後撰 しなのなる浅間の山ももゆなれは婦しの煙のかひやなからん すかの

續後撰 婦しの根をふきける風のならひまて残時ましぬ山桜かな 法皇御歌

玉葉 めにかけていくかになりぬ東路や三国をさかふ婦しのしら雪 前大僧正慈鎮

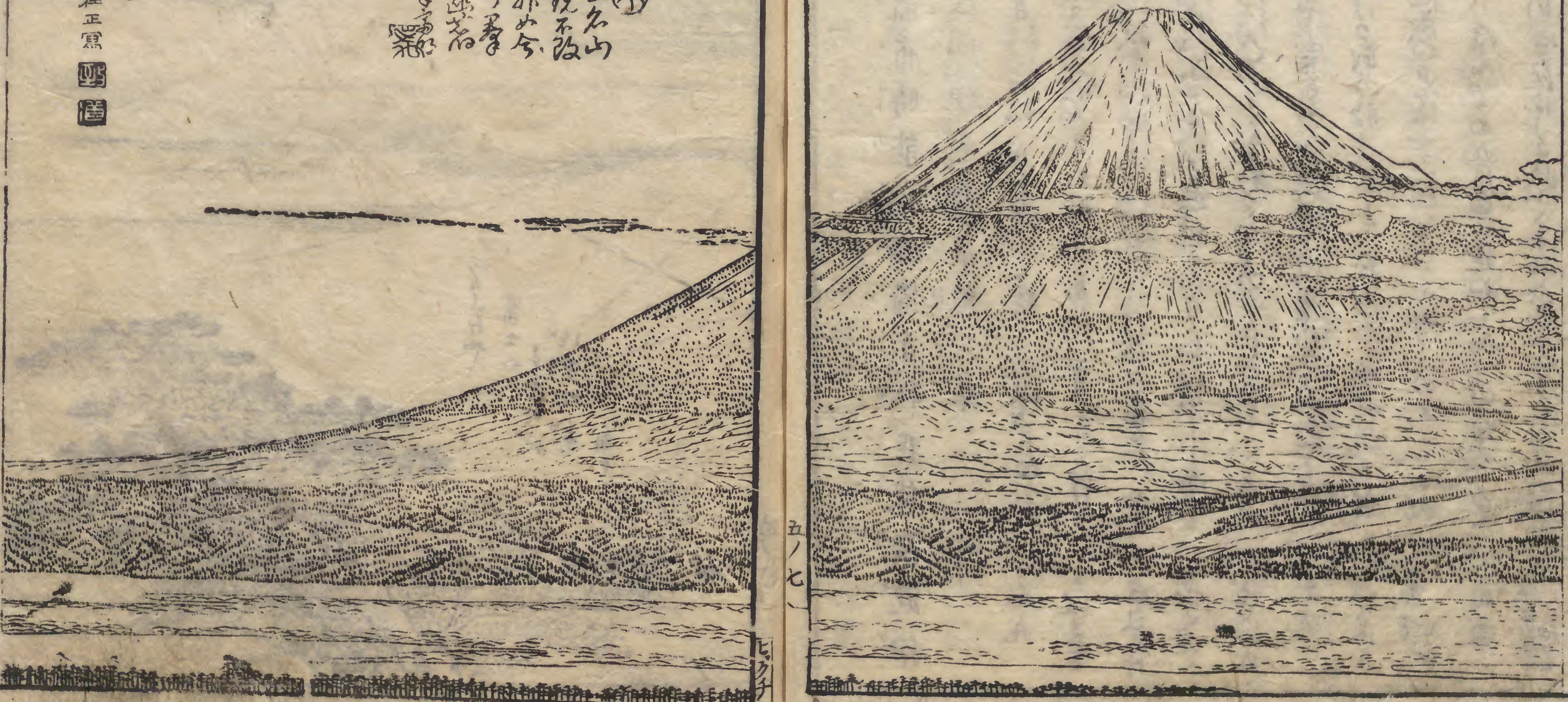
風雅 田子の浦ふしはしも見ぬ五月雨に絶ぬもふしの煙なりけり 信輔

同 婦しの根を晴る空にゆるされてすそ野よりたつ白雨の雲 惟宗光吉朝臣

題池生冨士山圖

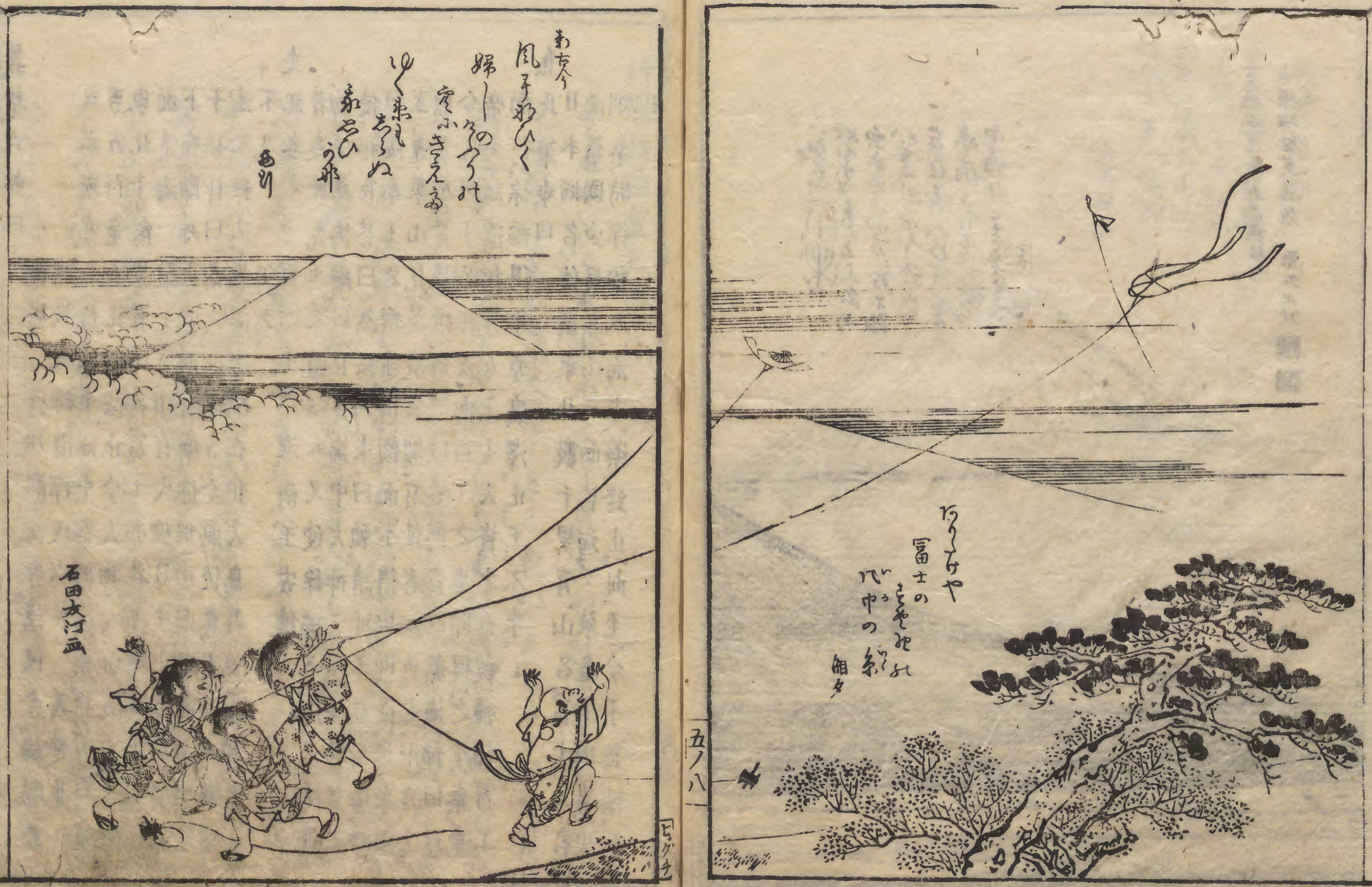
寒雲飛雪曉紛紛
梢露時着峯影分
秋光餘閑天半色
始知千里一勞君

大典禪師



[illegible]

寛政丙辰秋九月過駿河
吉原驛望芙蓉景　原在正寫



石田文汀画

義楚六帖曰

後周齊州開元寺講俱舍論賜紫明教大師進釋氏六帖　義楚集

日本國亦名倭國東海中秦時徐福將五百童男五百童女止此國也今人物一如長安中東北千餘里有山名富士亦名蓬萊其山峻三面是海一朶上聳頂有火煙日中上有諸寳流下夜即却上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至今子孫皆曰秦氏彼國古今無侵奪者龍神報護法不殺人為過者配在犯人島其他靈境名山不及一一記之

史記巻之一百十八　淮南王安傳

昔秦絶先王之道云云又使徐福入海求神異物還為偽辭曰臣見海中大神言曰汝西皇之使邪臣荅曰然汝何求曰願請延年益壽藥神曰汝秦王之禮薄得觀而不得取即從臣東南至蓬萊山見芝成宮闕有使者銅色而龍形光上照天於是臣再拜問曰宜何資以獻海神曰以令名男子若振女與百工之事即得之矣秦皇帝大説遣振男女三千人資之五穀種種百工而行徐福得平原廣澤止王不來

焦氏筆乘曰

日本國名倭國東北數千里有山名富士又名蓬萊國中最高山三面皆海一朶直上頂有火烟秦時徐福入海求藥終止此至今子孫稱秦氏

竹取物語登天段

かく屋姫いふこゝにも心にもあらてかくまかるにのほらんをたに見おくり給へと
いへとも何しにかなしきに見送り奉らん我をいかにせよとてすてゝはのほり
給ふそ具してゐておはせねとなきてふせれは御心まとひぬ文をかき
てまからん恋しからん折〳〵とり出て見給へとてうちなきて書
ことは此国に生れぬるとならはなけかせ奉らぬほとまて侍らて
過わかれぬる事かへす〳〵ほいなくこそおほえ侍れぬきおく衣をかたみと見
給へ月のいてたらん夜は見おこせ給へ見すて奉りてまかるそらよりも
おちぬへき心ちすると書おく天人の中にもたせたる箱あり天の羽
衣いれり又あるは不死の薬入れり一人の天人いふ壺なる御薬
奉れきたなき所の物きこしめしたれは御心ちあしからんものそとても
てよりけれはいさゝかなめ給ひてかたみとてぬきおく衣につゝ
まんとすれはある天人つゝませす御衣をとり出てきせんとす

その時にかくや姫しばしまてといひてきぬきせつる人は心ことになるなりと
いふもの一こといひおくべき事ありけりといひて文かく天人おそし
と心もとながり給ふかくや姫物しらぬ事なのたまひそとて
いみじくしづかにおほやけに御文奉り給ふあはてぬさまなり 文詞
かくあまたの人を給ひてとゞめさせ給へどゆるさぬむかへまうできて
とりゐてまかりぬればくちをしくかなしき事宮づかへつかうまつ
らずなりぬるもかくわづらはしき身にて侍ればこゝろえずおぼしめ
されつらめども心づよくうけたまはらずなりにし事なめげ
なる物におぼしめしとゞめられぬるなん心にとまり侍りぬるとて
いまはとて天のは衣きるをりぞきみをあはれとおもひ出ける
とてつぼのくすりそへて頭中将よびよせてたてまつらす中将に
天人とりてつたふ中将とりつればふと天のは衣うちきせたてまつり
つれば翁をいとおしくかなしとおぼしつる事もうせぬこのきぬきつる

人は物思ひなくなりにければ車にのりて百人ばかり天人具して上りぬ
其のちおきなおうなちの涙をながしてまどへどかひなしあの書お
きし文をよみてきかせけれど何せんにか命もをしからんたがため
にか何事もようもなしとて薬もくはずやがておきもあがらでやみ
ふせり中将人々ひきぐしてかへりまゐりてかくや姫をえたゝかひ
とめずなりぬる事こまごまとそうす薬のつぼに御文そへてまゐら
するひろげて御らんじて（帝）いといたくあはれがらせ給ひて物も
きこしめさず御あそびなどもなかりけり大臣上達部（かんだちめ）をめして
いづれの山か天にちかきとゝはせ給ふにある人そうす駿河の国
にあるなる山なんこの都もちかく天もちかく侍るとそうすこれをきかせ
給ひて
（御門）あふこともなみだにうかぶ我身にはしなぬくすりも何にかはせん
かのたてまつる不死のくすりつぼに文ぐして御使に給はす勅使には

月の岩笠といふ人を召してするがの國にあなる山の嶺にもてつくべき
よしおほせ給ふ嶺にてすべきやうをしへさせ給ふ御文
不死の藥の壺をならべて火をつけてもやすべきよしおほせ給ふ其よし
うけたまはりて兵者どもあまたぐして山へのぼりけるよりなむ
其山をふじの山とは名付ける其けぶりいまだ雲の中へ
たちのぼるとぞいひつたへたる

此物語は源順の作なり詞幽玄にして久代より世に賞ずる事久し按るに
富士を兵士に富とりて書なせり又不死の藥を焼しより不二の名ありと
も云へり或は不二不盡とも書り又秘藏抄に富士の十名を挙て云
藤山 嶽山 鳴澤 高根 常盤山 塵山 二十山 三重山 新山 見出山
三上山 神路山

伊勢物語

富士の山をみれば五月のつごもりに雪いとしろうふれり

新古今 業平朝臣

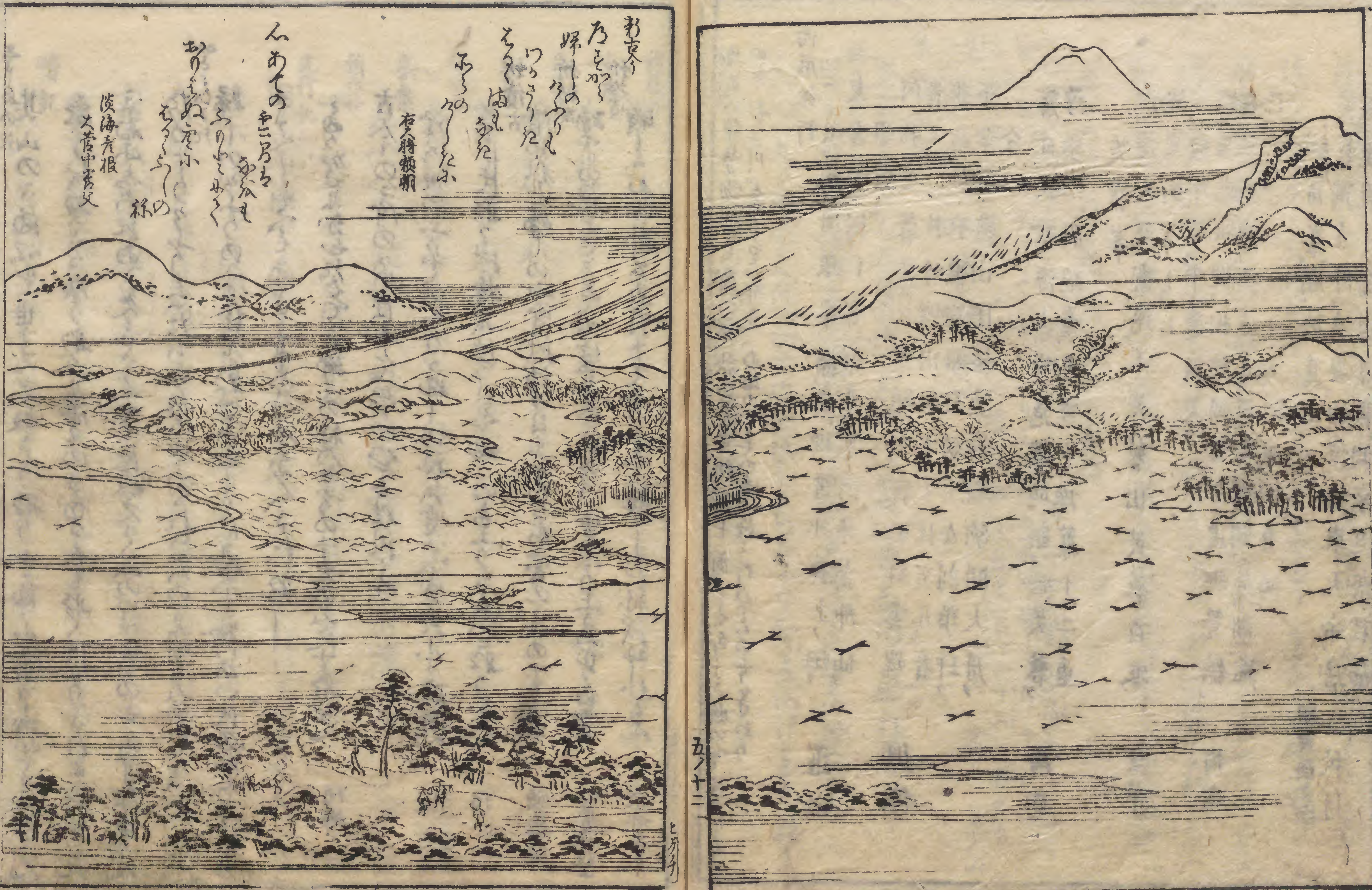
時しらぬ山は富士の嶺いつとてかかのこまだらに雪のふるらん

其山はこゝにたとへば比叡の山をはたちばかりかさねあげたらんほどして
なりはしほじりのやうになんありける

塩尻に伊勢物語七箇の秘訣の其一を所謂七箇とはむかしをとこの事。月やあらぬの事。あくた川。すみだ川。都鳥。みよしのゝさその事。終に行道との事等なり

丙辰紀行 羅山

一山高出衆峯巓　大古同若嶽裡雪冰雲上烟
何物天一芙蓉落　青天杜中寒開雰泡緑雲端
誰指仙衣縹緲出白雲千秋只看女剖琅玕
于今石跡山陰地與玉
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　徂徠
落日秋寒海上峰危樓西顧眺芙蓉
浮雲不隔瑤臺色雪下珠簾十二重
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　萬菴
芙蓉峯
大海天連天芙蓉出芙蓉白雪
光更銜此盡海上日
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金華
駿州道中逢故人雪中虞卿登橋
四馬悲征役相逢風
在范叔綈袍空蓮嶽雲猶闕萍洲途
己令從此去何處問春鴻
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　周南
賦富峯贈熊其山
芙蓉獨立卧清虛始信大東天帝居
堪競俊才高復潔氣調来追奈君如
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　朝鮮國文學 秋月


新古今
みちすから
ふしのけふりも
わかさりき
はるゝまもなき
そらのけしきに
右大将頼朝
淡海彦根
大菅中書父

さらしなの記
其山のさまいと世にみえぬさまなりさまことなる山のすかた
こんしやうをぬりたるやうなるに雪のきゆる世もなくつもりたれは色こき
きぬに白きあこめきたらんやうにみえて山のいたゝきのすこしたひらき
たるよりけふりはたちのほる夕くれは火のもえたつもみゆ　云云
いさよひ記
婦しのけふりのすゑも朝夕たしかに見えし物をいつの年より
かたえしとゝへはさたかにこたふる人たになし
たかかたになひきはてゝか婦しのねのけふりのすゑのみえすなるらん　阿佛
古今の序のことはとて思ひ出られぬ
いつの世のふもとのちりか婦しのねの雪さへたかき山となりけん　同
くちはてしなからの橋をつくらはやふしのけふりもたゝすなりなは　同
新續古
浪にけし婦しのみ雪は消る日もあれと富士の山の下紫　順徳院
新勅撰
婦しの祢をこゝにても空にしられつゝ雲より上にみゆる白雪　守覚法親王
新拾遺
時しらぬ山郭公五月まて雪ふる婦しの祢はいかにすむらん　祝部行氏

新後拾
婦しの祢をはるけく見れは白雪の時もわかすかゝる山の奈　藤原長秀
家集
人しれす思ひするかの婦しの祢のはてしとかくやもえわたらん　伊勢
月清集
婦しの山きえぬれはやゝとくふる雪の一日も夏になる空そなき　後京極摂政
家集
焼人もいつしかまりふしの山雪のうちより煙たち出て　源重之
万代集
舟とむる田子のうらはの夕しほにふしのみけふりたえまつれなくる　常盤井入道二品親王
家集
草ふかみすゑにはきゆる蛍かけ火とみゆるそふしの煙なりける　大中臣能宣
新六帖
するかなる中ゆくけふりのふしの高ねの雪の色に似たるらし　前納言為家
光行紀行
田子の浦にうちいてゝ富士の高根を見れは時わかぬ雪なれとも
なへていまた白妙にはあらて青くして天にそひへたる山のすかたも
たよりなし貞観十七年の冬の比白衣の美女ふたり山の峯
にならひ舞と都良香か富士の記に書たるいかなる故にかと覚束なし
富士の根の風にたゝよふ白雲は天つ乙女の袖かとそ見る　光行
曙記
このやまの名残なく空はれて富士の嶺まて雲もかゝらぬ春の日なか

聞くたに曙之まさりて慕ひくる人あまた物されて御旅宿より
ゐひ所せられかれて志きにうふさやさせ給へと御定有けるは
富士の御當座あそはしたまふ御詠　二條左相府
おもかけのかゝるとは今見てひにきそふそむる峰の白雪
おほくおきたひすしの志ら中は詠み幽玄抜群の尊詠なと為君
あけほのゝ春にみそむる峰のまたわれなく人すてかたらん
御かゝるを山口志らて見けなからん

毎見士峯聳九天　霞露仰弥高
荘周曾日泰山北　一ケ比倫秋兎毫
光廣公

八重かさすらもかくさて峰の山田乃よ幾れはさくらくれ
同

東紀行
かゝる百根をかけて暁る日に出て見てそむる峰の祢
帝掬崑崙雪置之扶桑東
突兀五千仭芙蓉秀碧空
涂乃村口

うしお見て
人ことに言ひつたへん云の美しき姿を富士の田れ乃曙
秋正山

浮鴻原にて
峰の祢の雪吹おろし風見へて一むらくもり浮嶋か原
琉球人讀谷山王子
同

詠富士山
嶽色遙浮遠客航　擬従高處振衣裳
環形屹立雄天地　積氣常寒擁雪霜
瑞靄清籠池上竹　灝光低襲海中来
詩篇恰有愚公力　移得孱顔入彩囊
右朝鮮人李礩東郭詩次日本随月
韻贈焉云云

元日の見る物にせん婦しの山　宗鑑
富士の山ゆきとけなからすゝしさの有　湖春
冨士に替て三月七日八日二の餅　信徳
目にかゝる時やことさら五月不二　く世次

不二乃繪賛
三帆舟を橋尾に物るかれみかな　其角
冨士の多く日まし高し梶乃音　加賀千代
百冨士や替も元日乃にしきより　舊國
あれきりや空にあられぬ婦しの山　佳棠
四萬八千丈冨士にまたふしのたみかな　雜角

武衛頼朝卿ハ烈國の諸侯を
従へ三國ふ及びたる富士山のすそ
牧狩し由へ畢る
實ふ征夷将軍の
いきほひなるべし

祖先の
源頼光公ハ
大江山の鬼神を
退治ありて
名信ともふ
弘伏の姿ぞて
登山しけるを
同月の論ふあらざれ
君子ハ危ふきに
近づかずとして
ちりまし侍る

其二
不二の牧狩

国立公文書館
National Archives of Japan

又冨士は芙蓉と称る事ハ八の峯八の谷ありて其體ハ蕖の蓮華
に似たり不二とは都氏の宜ふ郡の名によりて称するを本として亦は
生るとも謂ひ蕃るとも駿甲相の三国に跨りて嶺は十五州の壮観にて
青天忽見素羅笠羅笠擔中十五州と惺窩先生も咏じたまひ又石
川丈山も雪如紈素煙如柄白扇倒懸東海天とも賦し京師の四明大
和の金峯よりも見ゆる尚も肥の崎陽より百里ばかり漕出して大洋より
冨士峯見ゆべく外夷の船我邦へ渡海の的とせしぞと聞ゆむかし
孝安帝九十二年此山初て現ずとしも又孝霊帝五年近州琵琶
湖と倶に一夜に現ずともいひ傳り或説には大昔より此山雲霧深
くしていまだ現はれば人民もまだしてあらわせる事なし孝霊の御
時初て晴られ見顕しなるともいはれ辨も都氏の記にはいへざ
れば正説にはあらず本朝の高嶺にして絶頂まで九里餘直立の
高さを積れば都て一千五百丈ありて小斗に近し峯の貌妙にして葉半も

塩尻に似たりといひ夏天に雪は戴けば萬葉に詠ば嶺ハ平原にして
其中を鳴沢とて凹みして甑の如し底に池あり今は水涸て無し虎
石とて虎の蹲たる似たる石ありまたそこを夜陰に旭は耀し呈みも三尊佛
は拝すとぞ遂に東北は見下せば海面幽にして島嶼浪に臥ば鷗の如
西南ハ只雲霧朦朧として水や空とも見えわかず山路ハ三の街ありて
東よりせり人は筋になる裾野を長くして百里に往る尾の冨士見
原遠の汐見坂まで此山の形相同じ三穂浦見神原よりは良に當て浮島
たる原より原を正面として裾野まで鮮にて山趾東西に長し三嶋
箱根より伏籠の貌に見へて鎌倉よりは小の方甚延て武蔵野
よりは西南にかたよりて江府の赤坂駿河臺よりは優輿の窓に眸と動し
日本両國の橋上は馬上の人の首をめぐらし駿河町の名も富士に寄す
延喜式に浅間神社は此山の神にして木花開耶姫を祭る大山祇
の御女にして瓊々杵の皇妃なり花とは櫻樹に天縁のあれば冨士に櫻

は詠じ給ふまでは縁ありて三嶋を大山祇の命なれど土俗御親子とし給ふ
なるべし水無月の禅定を松明は照らして行方幾千万といふ数しれず
真砂は諸人の裾に就くありて其夜よ字は光る其音流れの如し
さて字に鳴沢の名ありまた里人いふ冨士の御神の砂はおし
みなふと我し竹取物語にて竹とりの翁といふ者有て竹のなかに
ある時其竹の中に三寸ばかりの人ありけるを見つし是を悦び育たるに
幾の間に生長し艶顔なる事限なし屋の内を光満くたるより
名はかくや姫といふ風土記にまたは鶯姫と称し今昔物語にも
見へ詞林採葉にも 天智天皇此姫は養せらひ倶に此山嶺の窟
に隠れくおはしますと記し又桓武天皇かくや姫は是あひ勅使とまいり
されたまひは不死の薬は献ってまゐらせ上しけるは此を其薬は焼し時冨士の
名を其の三の煙り果にあたふ起るやまり 天智帝を京師御廟ある
より昇天し給ふとく御当の岸る所に陵を築て陵村の名今にありけ日本紀

に大津宮より山部し給へとあり或人の云寶亀は天皇巡視し給ふ時薩摩潟
康見鴻のかたより崩じ給ふ今も御陵の跡にありしと其国の人の語り
しと書られ秘蔵の本にあり 桓武帝陵は京師深草柏原にあり一千年
に建ずといへり其所顕然たり故に柏原天皇とも申せられ源順の竹取
物語と書れしを荘子に数く寓言し難波の奥に冲阿闍梨は寶樓閣経
おさめく著されしを宜ひし古雅の名文にして歌道の標とある赤人の
白砂に登は取後成卿さあるさに名は残し西行法師は五文字を置
給ふ頼朝御きを牧狩に武将の威を耀し曽我兄弟は倶に天を戴ざる
をそ本意は達し常陸房は仙境に入仁田忠常も人穴に名高く役
小角は木履にて歩き上文たる子は驟駒は馳空海圓珎も登山して
石佛は携ぐ徐福は秦帝は欺ひくここに来り絶頂の乾米腹乃雀
冨士松の紅葉不二甘草みぐ茨菰婦ぐ海苔冨士の八湖を倒る気
と浸し甲州の府より三川の嶺より見へくた法眼の霞乃姉ぐいはせてなるべし

むかし此東海道ハ冨士愛鷹の山乃ふもとを通り其中ふ横走関と
いふあり愛鷹清見横走これは冨士乃三関といふむかしの道は旅人多け
く通り重服觸穢もいれども愛鷹明神かく厭せ給ひ南海の中にゆかれ
ける鴻は打よせさせみて今の海道をおきなる其おもれし
浮嶋は浮嶋原といひ傳へ侍る抑三國無雙の名山と賞し義楚六
帖及び宗學士が日東曲にも褒えて蓬莱山と稱る所紀の熊野尾の
熱田は山なる爲しそれが中にも最上にして真に　我邦の仙境梅福
九華真妃もおちるを憾多き事なるべし

神社考

孝安天皇九十二年六月冨士山涌出初ハ雲霞
飛来如轂聚無嶮岨後頂上五盤石出其落下
趾作溪壑取郡名而曰冨士山形似合蓮華絶
頂八葉層々到第八層中央有大窪窪底湛池
水色如藍涂物飲之味甘酸治諸疾池傍小穴
形似初月穴中或燃出黒烟雨土沙或白雲金
光映徹現鬼神形赤黒色兼和三年季春垂珠
簾雨玉四方貞觀五年秋白衣神女出現雙立
舞遊時火炎揚有圓光即祭之号火御子古老

傳云昔大綱里有老翁嫗共居翁愛鷹嫗飼犬
後住乗馬里作箕為業竹節中得一女其長一
寸餘奇之裹綿養之経十六月漸長成能行歩
容皃端巖言語和雅于時天子詔諸國撰美女
令獻之采女使者至駿河國冨士郡乗馬里病
老翁宅終夜有光使者怪問曰何故道夜燃火
哉答曰我女之光彩也使者窺之其女甚美也
於是謂云天子求女汝誠當矣女不從使者奏
事于時女語父母曰親子之愛養育之恩誠重
誠深雖然我久不可住今我登山去母云思慕
如何女云常来相見乃上冨士山入巌崩已而
天子来於此幸乗馬里翁曰其事天子大歎遂
與翁登山休於第五層脱玉冠留此處漸進陛
絶頂臨巌崩女出迎微笑曰願天子住此因其
入崩中玉冠所在積石以為陵云延暦二十四
年託曰我號淺間大神平城天皇大銅元年立
社祭之改乗馬里号一齊京所謂翁者愛鷹明
神也嫗者飼犬明神也愛鷹山今云鷹高山二神共住新
山宮

冨士鳴澤

冨士の嶺にあり都氏記に昔より神池ありて水火剋し煙は絶
々霧のかゝりし跡を鳴沢とよぶふじの煙と詠し後世池も埋れ其
潤く尊もなけれど今も古今の序にふじのけふりもたゝずなりとして貫之も書たま
り盛なる今も岩間より煙すのかく燃ゆるのほとりといふも此の御事かんなれ

万葉

佐奴良久波多麻乃緒婆可里古布良久波
布自能多可禰乃奈流佐波能其登

続古　くゆる思ひも下や絶なん婦士の鳴沢音むせぶなり　後鳥羽院

新拾遺　さみだれは婦士の鳴沢水越て音や烟に立まさるらん　慈圓

同　飛かける思ひをかけし鳴沢にうつる烟も久しかるらん　権中納言雅

夫木　紅葉ちるふしの鳴沢風越て清見が関に錦おりかく　俊頼

同　さえわたる高根も雲のうちにしてなほさはふじの煙成けり　俊成

無名抄云
五條三位入道いはく此ほどの長者にて歌をこそされ也ふじの鳴沢といふの歌よみてはべりしを入道とて人に笑れおもひしといへどもいはむ道乃遺恨なくおもひ給へまれりはしもふかねはかはしおもひわりなくいまだにふかにこそ

藻塩草云二説一は鳴沢にあるなりさし書ぬれはさしはふしの山よりいさごなる事あり其鳴音は鳴るといふふしの山は白砂鳴へなるれかる事を一定なり人のおもしろにはれくいさこなりと

一説の間に上るとこそ
田籠あるひは田兒とも書ん都て清見興津より北し浮嶋原と田子乃海をの總称なるべし

田子浦
万葉　後居而戀作不有者田籠之浦乃海部有申尾
珠藻苅々

拾遺　田子乃浦にかすみのふかく見ゆるかな藻塩の煙立やそふらん　能宣

同　さしかへる田子の浦波よせぬ日はあれども君をこひぬ日はなし　読人しらず

新古今　沖津風夜寒になれや田子の浦のあまの藻塩火たきまさるらん　越前

続拾遺　田子の浦の藻をもて埋むかすの磯乃雪もきえぬかな　信實朝臣

風雅　たえまなき浦乃塩やきいとまなみ五月雨に絶ぬふしの煙なりけり　参議雅経

新拾　五月雨のふる江のむしろ乃苫屋まで打こえてかる田子乃浦波　法印定圓

続千載　旅人のたえぬ日もなしあはれまた弥乃田子の浦波　平齊時

草庵　田子の浦やふしのたかねの雪見えて波もかはらぬ山の白雪　頓阿法師

家集　わが恋はふかき思ひにまよふらむ田子乃浦波寄せむ時もがな　源信明

新撰内裏詩歌色紙形に
白波のよる方をしらでなくたづのかならず田子の浦波　飛鳥井宰相雅宣卿

冨士の根の雪のおろしの吹つれば田子の浦の田子の浦浪　元政法師

焦思塩竈鑿空烟世路艱難最耐憐生愛風光多子蛍擔頭潮汲月明還　澤庵和尚

續日本紀天平勝寶二年駿河國守楢原造東人等於部内廬原郡多胡濱獲黄金献之云々

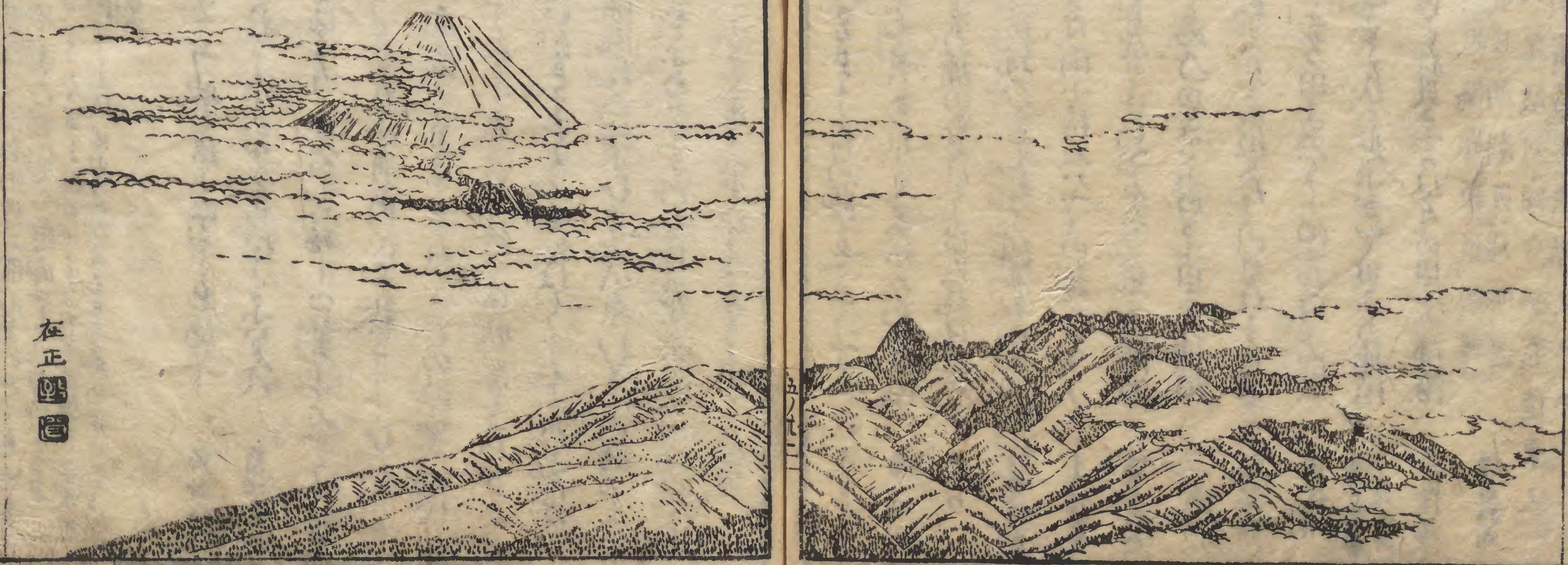
田子浦

重水兼天珀石海門杳
生愁嵌空蓮嶽古點綴
房浦舟窗戸青煙細漠々
鹵中浮人家依疎竹漁笛
過魚洲蒼壁忽斗絶
峴若危梯僧嶋石間見
林巒隔橋幽遐通争發役
汎覽不服酬山水雖雅好
遠客可出函田江楓合愁思
石尋憶謝蔣氾珀宏
西延首慕良儔清泪徒
盈掬憑寄恨東流

僧六如

嗚呼ゝ富士
釈迦の生れし
国ならし

藤岑



在正画

冨士沼（ふしのぬま） 吉原の北にあり冨士八湖の其一つ丙辰紀行に羅山子の曰る所一の善徳寺村今は今泉といふ治承の戦場の遺跡はこれなりしとなり抜すみに昔は此沼東西三里余もありて冨士川のかゝりまで続き平氏の軍勢水鳥の羽音に驚き敗走せしも此沼なりん今はあせて纔の沼となり
あらたに漁しける鰻は四つ屋柏原の茶店にて出して賞翫なり

夫木
春草はかりふかくの成にけり浮嶋沼に駒やとめ見ゆ　源仲遠

新後百首　浮嶋原にて
水ちかき紀嶋の中の沼のほとりいさよふ鳥はさきにたちけん　前大納言為相

光行紀行
浮嶋か原をいくよりも過ゆきて見れは北は嶺しの林茂りて登りかけて誠にして空も水も霞たる川なりせ戸から小舟所々に棹さして向ひ行ける大方南は海の面遠く見えさされて雲の波煙の浪いと深き眺なりとも　孤島の青ねに遮る所　終に遠帆の空にけれて見たる臨むたあさかき此眺望いつにも増りくにゝほそしくは青空の名付たくえつからく浦風松の梢にむせひ此原わしは海の上にうちひく蓬莱の三つの嶋のぬくにたゝへに浮嶋と所は名付たると聞にもおのつから神仙のすみかとも有んと云しくぞ見ゆるしく見ゆ

夫木
新川も波の入江乃めしの根の煙も空にうれ浮島か原　光行

左冨士（ひだりふじ） 吉原驛（よしはらのえき）より九町許東の方中吉原といふ所より西へ町斗の間は左に見て行くる也旅人道乃非規ありとも京師より江府に赴く時は左の方にかりゆるよりて名とす江戸より京師に上る時は右の方に冨士を見て

元吉原（もとよしはら） 今の吉原駅初はおくにあり砂山比蔵香久山妙法寺より一日蓮宗の寺あり又毘沙門堂あり此尊像は聖徳太子の御作にして長八尺肩上に聖徳王乃尊像を戴す初は江戸にあり
又香久山稲荷明神の祠あり

鐙石（あぶみいし） 妙法寺毘沙門堂乃前にあり長さ二間許幅三尺
形鐙に似たるを以て名とす

手児呼坂（てごのよびさか） 元吉原四ッ屋にあり八雲御抄夫木集藤塔草
倶に駿河国に入

万葉
安都麻道乃手児乃欲婢佐可古要氏伊奈波
安禮麻古非奈能智波安比可奴母我
同
安豆麻比能手児乃欲妣左賀古要我祢氏
夜麻尓可祢牟毛夜抒里波奈之尓　紫式部

主木
ゆらはと遠方人の聲かくせ義ありつるたの呼坂

寶治百首
いまもやとゆるしあはれそのよひ坂誰かこゆん　兼家光俊

要石（かなめいし） 一本松村の濱辺にあり傍に石造乃祠あり高潮打よる時此石より陸地へ
来る事なし故に要石の名あり此辺の漁家ては初夏の頃は大細鱗
地引して鰹を漁する事多し海濱の風景よくして伊豆の岬までも見え
まうりて駿浪天を浮むの情境なり

原駿のわたり一本松村ハ
多く漁家ありて初秋
より時ハ磯に出て網を
ひくの聲ひゞきわたり
故園二千里長江十二風
と作せしも此あたりの景
なるべし

拾を
いろ海の
波にも似たる
浮鴎へ
松にあかるを
寄て
頼まん
よの又

芝瀬川（しばせがは） 風土記にあり土人云猪頭村より流れて下流は富士川に會る 和布とも芝川と詠るは此川筋より海苔は生る所謂芝川のりと富士海苔これなり

夫木
夏も猶雪けの水の月さえてあまたゝりぬへき峰の芝川　法眼源全

家集
高根より消ぬ雪は流るとも月に澄きる婦しの芝川　源氏真

浮嶋原は浮嶋か原なり北に富士沼南に大洋漫々たり其中の曠原なれは八
六名あり原吉原蒲原これは三原といふ沼津まで三里半

駿河 原

新勅撰
あしか此関路越けむ志のゝ斧に一むらくもむ浮しまか原　後京極摂政太政大臣

風雅
吹わたるふしの高根の朝風に袖さえわたる浮嶋か原　[illegible]

新拾遺
白妙のふしの高ねに月寒て氷をしけるうきしまか原　源道長朝臣

夫木
旅人の道ゆくくれもふりつもる雪にうきしまか原　安嘉門院四條

同
ふしの根の裾野はかけて鳴鹿の聲もうきにうきしまか原　同

建保百首
ときしらぬふしの雪けの雲晴て有明の月の浮嶋か原　順徳院

同
さよちとり聲遠さかる波の上にかたふく月の浮嶋か原　正三位知家

同
雲の波尾はなか浪のそてふりて霜のたつ浮しまか原　従二位行能

千五百番
汐満ちは雪に打あく見ゆるは波にたゝよふ浮嶋か原　法眼顕昭

家集
よの中はあはれうき嶋の行る波にむすはれてぬるゝ袖かな　参議雅経

行処是皆浮嶋原　生涯寄不留痕
雖蔵身尚未蔵影　帰去来号無[illegible]　沢菴和尚

貞徳海道記
うきしまか原はいつれを名とせしか名あるく殘しまし聞えけれと海中に立る人まとに野径となり千草むすほゝの木の林あり遥にとれわたる人煙片々と絶々たる新樹の枝は深く蔭たなひくに沛し東行西行の客ハ目をなくさむ村南村北のうらにたゝ山海を見捨

白隠禅師蹟（はくいんぜんしのあと）
原の驛鶴林山松蔭寺といふ禅宗なり家は僧を当駅中長沢氏の子にして叡智聡明の奇才なり十五歳の時松蔭寺にて得道し末師に学り諸山に直う文尾の名僧に随ひ三界門を出て四衢の道に至る近世の傑識たり終に明和五年十二月十一日寂す年八十四謚は神機独妙禅師と号す世に行ふ第二代遂翁和尚も亦傑識の名僧なり謚は宏慧妙顕禅師と号す白隠和尚行状に委しく書り左に著す

白隠禅師語録中頌古
清浄行者不入涅槃
間蟻争引青蜓翼　新燕並休楊柳枝
山婦携藍多菜色　村童揄箸折疎籬　白隠和尚

深山佛法

深林漏月寒猨叫　舊巣受風宿鶴鳴
烟靄輕浮補岸闕　藤蔓倒掛引薪行　白隠和尚

偈頌

示徒

活埋自性葛藤窟　刺殺已靈荊棘林
青薬黄菌白蘿蔔　紅爐猶泣止啼金　同

或問死後斷滅乎不斷滅乎予云
即今問著底是斷乎是常乎示偈

夢裏明々有六趣　了時無一點精鬼
善星纔起斷常見　生入泥犂永劫昏　同

駿州原驛松蔭寺

勅謚神機獨妙禪師白隠畧行状

師諱惠鶴號白隠駿州原驛人也俗姓長澤氏以貞享二年臘月廿五日生幼而頴達年甫十一隨母聽僧談地獄苦報忽發求法之願十五歳辭父母出家因松蔭寺單嶺傳公薙染十九歳叅問于諸州老禪三十一歳歸鄕嗣法於透鱗承公遂住于松蔭寺元文五年庚申春許唱虚堂錄妙機英發名聞于海内參學之徒數百後應四方之請講評經錄者凡五十會帝子諸侯延師聽法無虚歳明和元年甲申春就本院提唱大應錄參徒以千數爲五年戊子冬罹疾端然而寂實十二月十一日也享年八十四瘞遺骼於寺兕隅扁塔曰荊叢嗣其法者龍澤東嶺延慈松蔭遂翁元盧也所著槐安國語闡提記聞息耕錄普説荊叢毒蘂及國字法語遠羅天釜等若干卷行于世

明和六年六月八日

勅謚神機獨妙禪師

師齒迫山　浮嶋原の側にあり土人芝山といふ

万葉　荒熊之住云山之師齒迫山責而雖問汝名者不告

夫木　[illegible]　後京極院

興國寺古城　原の東今沢村のたゞ方にある篠山にあり當國大守今川氏の持城にて亀の代甲州の武田梅雪の家臣保坂掃部といふ者これに居る天正の頃小田原合戦の後中村式部少輔に此国を賜はる家来川毛惣左衛門此所に居る慶長六年天野三郎兵衛康景拜領し此所に居る同十二年三月九日天野が家人同国原田村の郷人と論してこれを殺す代官井出甚助聞之官に訴へ康景が非道露顕によりて改易せられ其後當城破却に及ぶ

阿野禪師古蹟　足柄山の麓井出里といふ所に公禪師は右大将頼朝卿の舎弟にして阿野禪師全成といふ

東鑑云

建仁三年六月於下野國誅阿野法橋全成云々

此井出村大泉寺といふ禪師の遺物など什寶とせり

阿野細江　阿野は井出村にあり小流足柄山より流れて富士沼へ入末は海に注ぐ藤蔓草に入てわり古称聞之侍

井出館古蹟

井出里をいふ右大将頼朝公冨士の御猟ありし時士卒に屯せしめ給ふ所也其時曽我兄弟父の敵工藤祐経を斬殺して御館に騒動しければ諸士出会相戦ひ終に十郎は仁田忠常に討れしかども五郎は猶頼朝公に一太刀恨み申さんとて切て入しに五郎丸に生捕られて庭上に引る右大将直に対面有て誅せらる其比十郎祐成が契りし虎といふ遊女井出館と見なして三島社に通ひ求しかれど三嶋におて車返しより本松原は細くこの日そて浮嶋が原にておねあられしよりして井出里に赴んとて行程ひてみれば六七町りばかれとそ十郎五郎屋の誅れさせぬ井出の屋形の跡とて待る又作れの人は松の中にそ五郎屋の誅せられし所なりとて虎御前おもかげなりけるの跡ますなり

露むすぶ清見しかはきて尾花か末に秋風ぞ吹

竹下道

冨士の裾野にあり一說に嶽下道なり下駿相両國の堺なり建武二年十二月十一日新田足利の両陣此所にて戦ひし事太平記に見えたる

続拾　あしから山乃梺にねて一夜宿かる竹の下道　平長時

風雅　あしからの山の嵐乃跡とめて花乃雪ふむ竹乃下道　前中納言為相

門　浮れ来に関の戸ささで足柄の山本くらき竹乃下道　参議頼政

横走関

冨士足柄の間にありいにしへの東海道之清少納言枕草紙に云関は横走の関又朝野群載にもある冨士のをとしつゝて直走の関と云

横走とも直走とも書れに対しける

名所ノ歌

未木　いふせんきくすきえてゆくらん横走る人の心は　源仲正

新羅三郎義光ハ
源頼義の三男にて
笙に絃を好て豊原
時元が高弟なり
奥州に武衡家衡
叛しゝ後三年の
軍に兄八幡太郎
義家大将として向ひ
下りしか義光は義家
の事を聞て許されざれば
官を辞して下る時の
まへに時元の子
時秋大食調の秘曲
をはまだ時秋へ授ず
義光に残しけるを
時秋出陣と聞て時秋
も跡を慕ひ来りて
下る義光ゆきて足柄
山にて義光相伝
のとをし後代へ伝へ
よと秘曲を授けし
事皆時秋
へ伝へし遺
ぞ時秋が節
び授くしなり

愛鷹山 又蘆高或ハ足高或ハ足柄とも書り古来より名所集相模国とれ代もとも冨士に連り原の駅より近くとりてちかく載る也原より北の方三里にあり読云延暦廿一年三月雲霧朦朧なる事十余日にして此山出現せり故に新山とりよ山頂の形塚みの如く俗に呼んで鷹が嶺とりて愛鷹山と冨士とのあはひの東海道之に望見ら関より冨士の旅おにて通り足柄ら屋鳥に替て箱根山へかゝりらり此間に横走関足柄関あり今ハならくも此道ありて甲州の往還とかり

万葉
とふさたて足柄山に舟木切木に切ゆきつあたら舟木を　満誓

新後撰
旅衣しくれてとまる夕暮に猶雲こゆるあしからの山　従三位為基

玉葉
岩かねをはするよそらの高けれハ雲のゐるかむ足柄の山　為家

新拾遺
あしからの山路の月に峯越てあくれハ袖に霜そ残れる　祝部成茂

足柄関

関ハあしからの関　あしから山上にの東海道にあり清少枕草紙に云

新勅撰
あしからの関路越ゆく志のゝめに一むらかすむ浮嶋かはら　後京極摂政 良経公

続古
よるきね関の戸さゝぬみよなれは月にも越んあしからの山　家隆

同
秋まてハ嶺の高ねに見し雲を分てそこゆる足柄の関　藤原光俊

新拾遺
しくれ行雲ハ外山に分捨て高ねに越ゆるあしからの関　卜部兼直

新後拾
行人の心をとめハあしから此関守神もいのりやあらん　藤原行朝

足柄神祠

神主仲津氏

神社考云足柄明神昔赴ク唐ニ其妻神独リ留守ス三歳明神帰朝ス妻神色白ク肥美シ明神曰思慕之情待ツ帰ヲ之心必ス可ニ痩セ今何ソ肥而麗哉不レ思レ我ヲ也遂ニ去ツ妻神ヲ

冨士人穴

北條記云 足柄山の麓冨士に續きたる所の人穴とりて建仁三年六月三日仁田四郎忠常鎌倉将軍頼家の命を受て冨士の人穴に入し事人口に膾炙せり

建仁三年六月三日将軍頼家卿駿河国冨士の狩倉に赴き玉ふ山の麓に大なる穴あり世の人これを冨士の人穴とぞ名付ける此穴の奥を見極めさせられんがために仁田四郎忠常を召て重寳の御剱を給り此穴の中に入て奥を極め来るべしとの上意也忠常畏りて御剱を賜り御前を罷り立て主従六人穴の内へ入けるが次の日巳の刻に忠常只一人穴より出て帰り来る往還既に一日一夜を歴たり将軍御前に召て聞召る忠常申けるハ此洞甚狭くして踵をめぐらす事叶ひ難し纔に壱人通るべくして心のまゝに進みがたし又其暗き事いはんかたなし主従各手毎に松明を

燃し互に聲を合せて行徑小路の間を水流て足を漫せば蝙蝠幾等と
なく浪のごとく火の光に驚きて飛翔り行さま滿ざる色黒き物其の
常に白き蝙蝠も亦少からずは水の流に随ふて小さき蛇の足にまとふ纏
はく事深なりし刀を抜て切流しく進み行に或は腥臭き臭を衝て
嘔噦せしむる時もあり或は芳しき薫ありて涼しき事もあり奥は
漸々に廣くして上の方は何やらん色透通りて青き氷柱のごとくなる
物おゝしと見えたり郎従の中に物に得たる者なるがこれは鍾乳とて
石藥之仙人是を取て不老長生の藥を煉と傳聞し也語候又歩み行足
乃下俄に雷のとゞめく音して千人ばかり一同に鬨を作る也聞ければ是は
定て修羅窟の音なるべしと恐しき事に存じて猶行ければ良
暗く松明を燃し續けたれども廣き所におちいり四方は黒暗幽々として
遠近に時々人の泣聲聞え心細き事さながら逝途の旅路も
向ひたどりしもさぞかゝる所なるべし大河に行かゝる事向べき縁鳥

も見えず漲り落る水音も凄まじく瀬も定らざれば逆卷く水に足を
浸し入りたまへば其水の早き事矢の如く冷なる事極寒の氷に勝れり
紅蓮大紅蓮の地獄の氷は是なるべし川向ひは其遠さ七八十間もあらん其中に
松明のごとくなる光向ひに見えて光さがり火の色中にあらば光の中に尊き
奇異の御姿ありありと顯れて見えたまふ郎従四人も其儘倒れて死れ
忠常の御靈を禮拝するに御聲幽に教させ給ふ御事有て即下し
給ひし御劔を其川に投入れば御姿は隠れ給ひ忠常は命助り
出て之と申せば頼家卿聞給ひ其奥を定て天地の外乃世界なるべし
重て渡し舟を絶せん人数を多くそろへて見届くべしと給ひ
古老の人々かたりしを聞て此穴は淺間大菩薩の住所也と申つたへ
むかしより遂に其中を見る事能はずと傳へ只今加様に事
破りたまへば將軍家の御身にとりて御慎なれども恐しく
くしき物語なる

文覚房ハそしめ院宣を
申請て頼朝に義兵を
揚させ今又平家を本ぼそ
六代御前を誅せらるゝ所な
源命令を下て頼朝より
赦免の免じみを下給く
今を助く此上人ハ源家
平家の仁にあたく日
讒に乏く懼む平の
甚しきこきてかハ
阿羅漢向ハ阿羅漢果の
佛道をやりつべき

八重山　足柄のかたはらの山の総名にもかぎり所なりとかや　あるひは此所の地名なるをあしからなし

万葉　上總國朝集使大掾大原真人今城向京之時餞之歌　郡司妻等

安之我良乃夜敝也麻故要伊麻之奈婆多禮乎可伎美等弥都々志努波牟

新千　きのふ今日都も恋し足柄の此関の八重山路を越て隔てつ　津守國量

名寄　降つもる雪にや八重をあらためてけふ隔てぬる足柄の関　中務卿親王

丸子神社　東間門村にあり　延喜式内社　駿河國帝ちの尊此所の生土神とかれ　例祭二月十六日　六月十七日

千本松原　沼津の駅の西南五反田村の海浜の松原なり　天正の比武田勝頼合戦の砌として此松原を伐拂ひ　今の松林ハ後世植継せる松原なり　十年　六代御前の石塔あり　彼の時にてみ誅せられたまひしを　文覚上人頼朝公に命乞して助け　後に又鎌倉にて誅せられたまふ

光行紀行

千本松原といふ所あり　海のながめ遠くして松むらかに生つゞきて見えたる此かげにまかせて　沖には船ども行ちがひて木の葉のうかべるに似たり　又幾その千株の松の下の双峯寺一葉の舟は中乃萬里の身と絶なまふくれも是をも何ぞ眺望いづくにも勝れり

見る千代ほの松の浦波をみるにはるかなる浪の上の船　光行

平家物語大意

去程に小松四郎時政鎌倉殿の御代官として都に上り平家の子孫と云はん人をば捜し出して亡されて小松三位中将維盛卿の若君六代御前十二歳に成給ひしを捜し出し　六波羅にて既に誅せんとせる所に高雄文覚坊が白命乞して鎌倉に下りけるが　最早廿日もたちけれども何の沙汰もなかりけれバ北条時政六代御前を具し奉りて建久四年十二月十七日暁雲井と餘所に顧て　六波羅の東路や逢坂の関打越えて大津の浦霧津が原をもゆくゆく野路篠原山宿々打過て　やがて駿河國にも成しかバ若君の御命も露の間ぞと思はれて　千本松原にとゞめ奉りて御輿を居させ奉り下させまいらせてあかしく敷皮の上にすゑ奉る　かゝる所に馬より飛下り若君の御命乞とて鎌倉殿の御書を持て来たる聖あり　文覚坊の弟子なりけり　是をみるに御命を許し給ふべき由なり　頓て具し奉りて都へ上り　高雄山のおくにかくし置れけるが　其後六代御前は出家して三位禅師と申されけるを　近江國にて失ひ奉りしとぞ　誠に平家の一門の御身にはなきものと思ひ参らせけるに　是又叶はせ給はず遂に斎藤五斎藤六を具して宜ひける

国立公文書館
National Archives of Japan

我道にて斬れたりと申さるれば其時は後の世の願ある身なれ共一向
は有様を聞召れて歎悲ませ給ひ浮世の縁も盡ぬとて鎌倉まで送付
て上る此上は申も宜へ二人の者共涙をはら〳〵と流し良有て斎藤五
涙を押て申けるは君の神も仏も感じさせ給ひ後命生て再び都へ
帰り上る事も共にならばとて又涙を押て跡にありし若君今は角と見へ
し時御髪の肩に懸りたるを押さへ哀しき御手にかく並べられ越させ
給ふ守護の武士共見参らせて扨も最惜き御心の中ぞやとて皆
鎧の袖とぞ濡したる廉に君西に向はせ給ひ御手を合せ高聲に十念
唱へさせ給ひ頸を延てぞ待れける将監工藤三親後斬人に撰れ
た太刀を引側め左の方より君の御後に廻り流に斬んとしけるが目も
くれ心も消果てければ小刀を打付しかども覚へず不作人に後付
られんとて太刀を捨てぞ除たるちかべば斬者と斬人と撰ぶに
不家に黒染の衣着たる僧壱人月毛なる駒に打乗て鞭を打てぞ

馳来る其外の者ども嗚呼最惜あの松原の中にて六代君を斬君を
小條殿の只今斬奉らんとする所の者共むら〳〵と走集りければ此僧少しもやすまず
小鞭を揚て招きけるが猶も覚束なさに着たる笠を脱で指上聲を揚て
ぞ招きける北條子細有とて待所に此僧程なく馳来り急ぎ馬より飛で下
り若君をば乞請奉る鎌倉殿の御教書是に有とて差出す北條是を
披て見るに誠や小松三位中将維盛の子息六代御前を尋出されて然る所高
雄の聖文覚坊の将て乞請ば疑ひなく可被預小條殿へ頼朝と遊して御判
あり小條押戴て三遍読て神妙々々とて指置れたれば斎藤五斎藤六は云ふに
及ず小條家の郎等共もみな悦ひの涙を流したる其より若君は文覚坊預
りにて都へ具して都で還上る

平家物語長門本には頼朝の薨し後文覚坊六代御前を謀叛に催し平家の残党と聞へしを
鎌倉小條より討を出し文覚を豆州へ流刑し六代御前は松原にて斬らし
ありしかば爰は石橋あり又世間流布の平家物語には相州田越川にて
終に斬られしとあり今も田越川のかたはらに六代御前の墓ありとの
事鎌倉志にも載れり未巻鎌倉の部下に見へたりいづれが其
是非知れず明ならん

驛路の杜若ハ斑女照手の末流にして
今も夕陽かゞやかに泊つて伽さん
とくお肌ぬいで大化粧ハ艶香ハ
小町紅松金油の匂ひこぼるゝやうな
姿ハはくもぢきの
ひさしとたで
顔ハ絲瓜の皮の
めづらしく旅客を
とめてハいふかよ
旅の夜さかみさ
出てゆくべい
おくをひき出し
やさしき 枕も
猛ふ毛の
生ておせう
しやく〳〵

ゆうとうく お泊り
君がまちぬ夜をまよふとも
わかぬかをきこの関ハ杜若
佐川やあやさア
旅人も
女も
旅のあハれ
深し
春泉画

頼朝卿冨士川
出陣の時源九郎
義経陸奥秀衡が
館を忍び出来
て黄瀬川の宿にて
兄弟対顔しけり
平治の乱より
絶て久しきなから
の親を申や喜悦
しきことん詩に
棠棣の萼鄂
とうしく韡々
たることんかと
燕ぞの来紙
伲ゑつか
おもはるそ

駿河 沼津

三嶋まで一里半当駅中浅間町に富士浅間神祠あり例祭九月十五日又社頭に猿田彦神の像石あり又神宝に雌雄の鶏石あり大サ二寸余○新田町に山王神祠あり例祭九月九日社内に富士の牧狩の時用ひしといへる釜あり車ハ秘する古代の作にして其形あり○沼津に三枚橋町の小の地名之東鑑に大岡乃ひ牧と牧将御所と記せり三枚橋いふハ官橋なり

車返し

光行紀行

車返しといふ里あり何がし家に宿りたれば烟霧がちにいとゞ物いそがはしきその棲の秋半衣のやうかとみゆくなるさむしろもかへるはるをおもひ縛戒人の旅寝もかくやなれんと覚ゆ

これを此浦のなからの旨をきしいとふあり袖おもらん　光行

貞応紀行

車返しといふは此所の帰帳のみちにあたりなりけん人ぞとなんたるよし昔魯の孔子の蒼をなむ小童の路中に小家を作りて遊び戯れしに孔子の車のこの所をよぎて通らんとする時小童の家の車とは通らずといひし事とぞ孔子きれいに車をかへし是より勝母の閭にハ曽子ハ孝の者なれバ通らんとせざりけり此所をも誰もいかで通りんと思ひ車返しとて嶮岨の地なれバ大行路といひ法庭しよの道ハそうしくあしくなるとくさ通しける騎馬の害なれバ折ふれ通りね

むかしみれたる車のなれちひさくなりてかへしみかれば宿るはじめかへん

冨士沼

沼津の東黒瀬松原に浮島が原なる地脉大に低し愛鷹山に遮られて冨士つらく近く見ゆるにより名とせり

亀鶴塚

二津屋の東石田村亀鶴山観音寺にあり白拍子亀鶴ハ建久の頃の風流女にして冨士の牧狩の御所に来りて工藤左衛門祐経と同席に列なる事物語に見ゆ此寺の縁起ハ此基の跡にて亀鶴が守本尊とぞ

黄瀬川

石田村の東ありていにしへの駅也遊女亀鶴ちつる住し所東鑑并に曽我物語などに見えたり

東鑑曰

承久三年七月十三日上皇鳥羽行宮遷御隠岐國甲冑勇士囲御輿前後中略今日入道中納言宗行過駿河國浮嶋原荷負之夫一人泣相逢于途中黄門問之按察卿僮也昨日梟首之間拾主君遺骨帰洛之由答浮生之悲非他上弥消魂不可遁死罪事者兼以存中若出於虎口有盲亀之命乎之由猶殆恃之處過同人已定訖之間如亡察其意尤可憐事也休息黄瀬河宿之程依有筆硯之次書付傍

今日スグル身ヲ浮嶋ノ原ニテモツヰノ道ヲバ聞サダメツル　宗行

於菊河驛書佳句留萬代之口遊至黄瀬河詠和歌慰一旦之愁緒云云

宗祇終焉地

黄瀬川の上一里許に桃園山定輪寺といふに宗祇こゝに終をとりて墓あり宗長記に人つまりて文箱根早雲寺に葬る

辞世

もろともや鶴の林乃なかにこそおくれぬる身もそらはありけれ　宗祇法師

自画賛

うれしくハ我形かへ世の為にとも花の下に露の身ぞある　同

誹諧

世にふるもさらにしくれの屋とりかな　同

宗祇法師ハ紀州の産にて姓ハ二善氏ハ飯尾にして洛陽に来り従二位飛鳥井雅親の門下にて連歌の宗匠となり世に鳴る一條兼良にも東常縁に就て古今傳授を受て後洛に帰り法諱を集め三条逍遥院實隆卿へ傳へそれより種玉庵と号し實枝に三光院實枝に細川二位法印玄旨幽斎に八条智仁親王中院通勝入道也足軒へ傳へ今に傳ふ後に尾張の国に到りて大成しぬ　しかるに宗祇法師より起りしとぞ

頼朝義経初對顔地

黄瀬川の東長沢村八幡宮の社地也　治承四年平家の軍勢富士川まで出陣の時頼朝こゝに出張ありまして野営ありしに又奥州より九郎義経来りて兄弟の對面ありし所なり

東鑑云

治承四年十月廿一日武衛頼朝令還宿黄瀬川給今日弱冠一人佇御旅館之砌称可奉謁鎌倉殿之由實平宗遠義實等恠之不能執啓移尅之處武衛自令聞此事給思年齢之程奥州九郎歟早可有御對面者仍實平請彼人果而義経主也即参進御前互談往事催懐舊之涙中畧此主者去平治二年正月於襁褓之内逢父之喪之後依継父一條大蔵卿長成之扶持為出家登山鞍馬至成人之時頻催會稽之思手自加首服恃秀衡之猛勢下向于奥州歴多年也而今傳聞武衛被遂宿望之由欲進発之處秀衡強抑留之間密々遁出彼館首途秀衡恪惜之術追而奉付継信忠信兄弟之勇士云々

千貫樋

三嶋の駅の西にあり伊豆の水を駿河へとりて田畝の料にあたらしむ　青銅一千貫をもつて水の料に賄ひたるより此名ありといふ　東堺にて流サ三四間斗の川ありて北より南へ流る其川の上を越へて東へ流し樋ハ長サ二十三間許なり常に流水滔々として増減なく　山里にも何国にもあらぬ中に高き所を流れて田園の潤ひ自在なりといふ　上古よりかくありしにや鎌倉樋といへり此所ハ豆州駿州の堺にして世に名高きもの也といへり

駿豆両國堺

則此千貫樋の下流を堺とする也

箱根駅まで三里廿八町此國都會の地にして商人多く賑し宿の西入口に小流あり伊豆駿河の堺也此小流より南に道を登りて二六中に捲く小糸郷ハこれより南武里にあり

（伊）三嶋（豆之）

伊豆三嶋神社

三嶋駅中にあり延喜式内名神大月次新嘗

三嶋の旧跡ハ頼朝公の配流せられし蛭ヶ小嶋も小糸の郷中にありと云

十六夜日記

ゆくゑをも三嶋の神乃みそなはしたにはかくとしもなくりきにけり　阿佛

祭神大山祇命　相殿四坐神秘社説云天平宝字五年癸丑歳顕座　和漢合運云聖武帝御宇天平五年三島明神出現

日本紀曰伊弉諾尊抜剣斬軻遇突智為三段其一段是為雷神一段是為大山祇神一段是為高龗

神代巻鈔云伊豆國賀茂郡三嶌神社攝津國嶌下郡三嶌鴨神社伊豫州越智郡大山積神社此三所倶ニ一神也

末社

見目祠 樓門の外西側にあり。八幡宮 同所にあり。嚴嶌祠 二王門の外西側池中にあり

東五社 ○船寄社。○飯神祠。○酒神祠。○第二祠。○小楠祠 倶に本社の後東側にあり

西五社 ○牽神祠。○第三祠。○聖神祠。○天満宮。○大楠祠 倶に本社の後西側にあり

別宮八社 ○二ノ宮 三嶋駅中葉町にあり。○三ノ宮 同駅田町楊原にあり。○四ノ宮 同駅小浜池の内にあり。○五ノ宮 同駅宮余町にあり

田川祠 三嶋駅外小山村にあり。○天神祠 同境川原ヶ谷村にあり

祇園祠 神領内祇園山にあり。○抜所祠 三嶋駅中後村にあり

舞臺 本社のまへ。○隨身門 社頭にあり。豊磐間戸命櫛磐間戸命左右に安置。俗に樓門といふ

鳥居 一所は樓門の外一所は海道の側に有共に石柱。○二王門 樓門の外にあり。○三層塔 二王門の東にあり

神池 二王門の左右にあり。○鳥部屋 塔の側にあり。○神馬厩 樓門の東にあり。○薬師堂 本社の後東の方にあり

寶藏。○神供所 倶に本社の小にあり。○馬場 本社の東側にあり

御祭 七十五度の内大祭正月元日同月十七日四月中酉日八月十六日十一月中酉日 神官矢田部氏 社家三十六人

東鑑云

治承四年十月廿一日頼朝東燭之程ニ令詣三嶌社給御祈願已成就偏依明神冥助之由御信仰之餘點當國内奉寄神領給則於寳前令書御寄進状給其詞云

伊豆國御園河原谷長崎

可早奉免敷地三嶌大明神

右件郷園者為御祈禱安堵公私所寄進如件

治承四年十月廿一日

前右兵衛佐源頼朝朝臣

光行紀行

伊豆乃國府にいたりぬれハ三嶋乃社のみしめうちをかみたてまつるに松のあらし木くらくおとつれて庭のけしきも神さひわたれり此社ハ伊与の國三嶋乃大明神をうつしたてまつると聞にも能因入道伊豫守實綱が命によりて哥よみてたてまつりけるに炎旱乃天より雨暴にふりてかれたる稲葉も忽にみとりにかへりけるあら人神の御なこりなれハゆふたすきかけまくもかしこくおほゆ

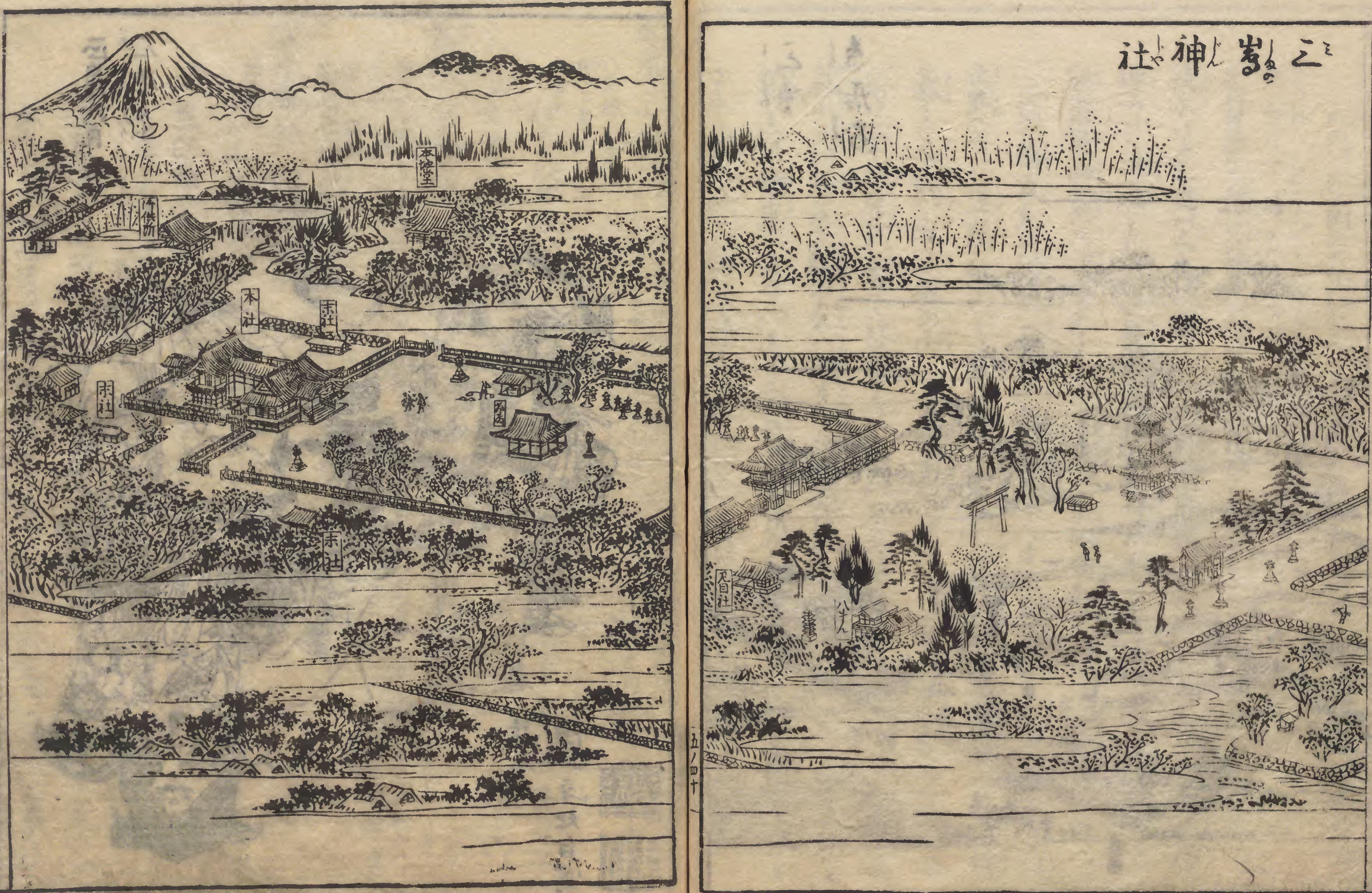
せきかけし苗代水のなかれきてまたあまくたるかみそこの神　光行

按るに伊豆の國府ハ和名鈔に田方郡とあり三嶋神社ハ延喜式に賀茂郡四十六座の内大社とみへたり又烏丸光廣卿東行の時霖雨して此駅に到り洪水して箱根へ越る事かなひかたく此社に祈りたまふ

三嶋
鳥居前

天の川井関のみなせんとやよ今も三嶋の神ならハ神　光廣卿
かく詠したまひしかバ神感ましくてたちまち
雨止んで晴天となりしとかや
是當社を攝州豫州三所共に三嶋と称じて大山祇命を祭るなり
讀にいふ三嶋ハ大山祇冨士ハ木花開耶姫にて御親子の神と且祈雨の
神にして神道にて三嶋龍雷傳とて神秘あるとぞされバこそ伊豫にて
能因法師ハ雨を祈りうたにてハ光廣卿ハ止雨の和哥をよミ給ふ治承の比より
三代の将軍九代の執権共に恭禮厚くして田園を寄附せられ宮柱
壮麗にして社頭巍々たり此神の使令として神池に鴛鴦鷗水に戯れ神
雞ハ鴈鶏をまじり驛の小川にハ鱣多く生じて手を拍ばあつまるによつて
いにしへより暦を製て社家よりおくられど三嶋暦とて神風や豊みてらの
惠にあまねき手の鞁の音ハ颯々たる松の風に交り鈴の聲ハ虫の音に通ふ
都て爰に鎮座しむかしより一千有餘歳を経れども神徳ハ日々に新にして
四方の貴賤まうでて此に詣して君が代の久しきを祈らぬハあらざれと覚えき

三嶋神社



走湯山 三嶋より南六里許にあり走湯権現山嶺にあり伊豆御山と称す頼朝已前小嶋に於て法華経書写千部の願ありしに出陣急になりしにより八百部走湯山に献ぜられし事東鑑に見えたり本社壮麗く石階と船ヶ峯三町にして山頂に鎮座す別当は般若院と称す

玉葉 伊豆の国山の南にいづる湯のはやきは神のしるしなりけり 鎌倉右大臣

瀧之湯 弐町許山下にあり巌洞より涌出して海岸に流るゝ其疾き事矢の如し故に走湯の名あり瀧は二所に一ケ所浴室ありて諸人こゝに浴す

熱海温泉 走湯山の西乃方壱里にあり潮の満干に通ひ岩の穴より湧出熱気よりて殊の外熱き湯なりとぞそれと寛ふとりて家々にて諸人入湯は平左衛門法斎湯釜中湯風呂湯川原湯渋の湯等の名あり土人云湯の名所は大湯瀧上湯とり入湯名権現は上の町にあり今宮権現七面祠本宮明神天神祠裕木龍本貴僧正の祠に新宮にあり

古々井杜 伊豆権現の西にあり

拾遺 あつかたにはせしくと郭公鳴てあるの森をいふにそ 左馬能光

同 思ひ屋るこゝ井の杜乃京にきよそ降る人の袖もぬれけり 元輔

辨範法師は八幡の宮の本にかゝりて伊豆の国に流れて又のとし五月に内の大弐の三位のもとに作りける

続拾 五月闇こゝ井の杜乃時鳥人しれずこそ鳴渡るらめ 藤原兼房

郭公こゝゐの杜に鳴聲はきくよそ人の袖もぬれけり 大弐三位

興小嶋 伊豆の海浜

新後撰 箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ　鎌倉右大臣

冨士見平 三嶋より海道筋東弐里許にあり三嶋より今井坂にかゝり船窪と云所あり是より八巻の日より鳶早く陣初め塚原臼井坂をこし市の山は兼坂とよ七面祠は菅興目堂あり大時雨坂小時雨坂を過て三ツ谷村下長坂笹原村に宗閑寺と云梵刹あり其ところに一柳伊豆守の墓あり並山にいたる山中田への近道なれども富士見の平にいたる正面に富士山三保の松原遥に見ゆる

山中古城 富士見平の東山中村にあり小田原北條の時ここに城を築き小條左衛門尉是を守る小田原征伐の時関白秀次中村一氏をもて是を攻る一氏が麾下渡辺勘兵衛重洞先登して勇威を振ひ味方の一柳伊豆守討死す小田原方にも間宮初め大勢討死して城陥れ町ともに敗走し遂に落城す今はこの城跡町の左の方にあり

豆相両国堺 山中村を過て小枯木大枯木石荒坂それより豆州並山の堺又甲石坂に甲石二ツありこれより東は相州なり

国堺 国堺の名所の名に左右双木老松多しこれより箱根駅まで十八町なり鎗石坂赤石坂を過て此坂の南の方に山神の祠あり箱根の宿の入口に芦川町より入る所に駒形権現祠あり然して此山路の左右こゝに篠竹多して自然と繁茂せりこれを刈て京都へ出し煙管の羅宇とす丹田に性堅くして佳し箱根竹とて名産なり

山路来て何やらゆかしすみれ草　はせを

相模 箱根

駅は箱根山の嶺にあり小田原まで四里八町駅中に関門あり 月窓章句日 関は境所に察出衛をいふ也又東市堂鐘堂あり南奴の旅舎つゞく 影絶頂にして眺望甚よろしく又墨天くもりなくして気色絶景なり小の方に駒ヶ嶽東北に二子山南に日金山伊豆の海絶景に見ゆる

夫木 足柄の御坂につゝん玉匣箱根の山のあきをんかし　柿本人丸

寂蓮集 十月はかり東の方にまかりけるに箱根とて山路わけ越ゆる所のありさるおそしくよの常にかはりたる道に深く雪ふりては海とはるか谷に今は越ゆる程にも風に木の葉散るわけて越くれの梢もをしみぬれば

旅の空雲もゝに越えつゝ越ゆれども袖の下よりそとる　寂蓮法師

過箱根山
客路辭郷垂陜句　千山猶是獨行人
單衫雲濕晴疑雨　老樹花開夏似春
仙鯉潭清無網罟　午雞村遠有朱陳
萍蹤未識何時定　仰望煙霞愧隱淪
六如菴

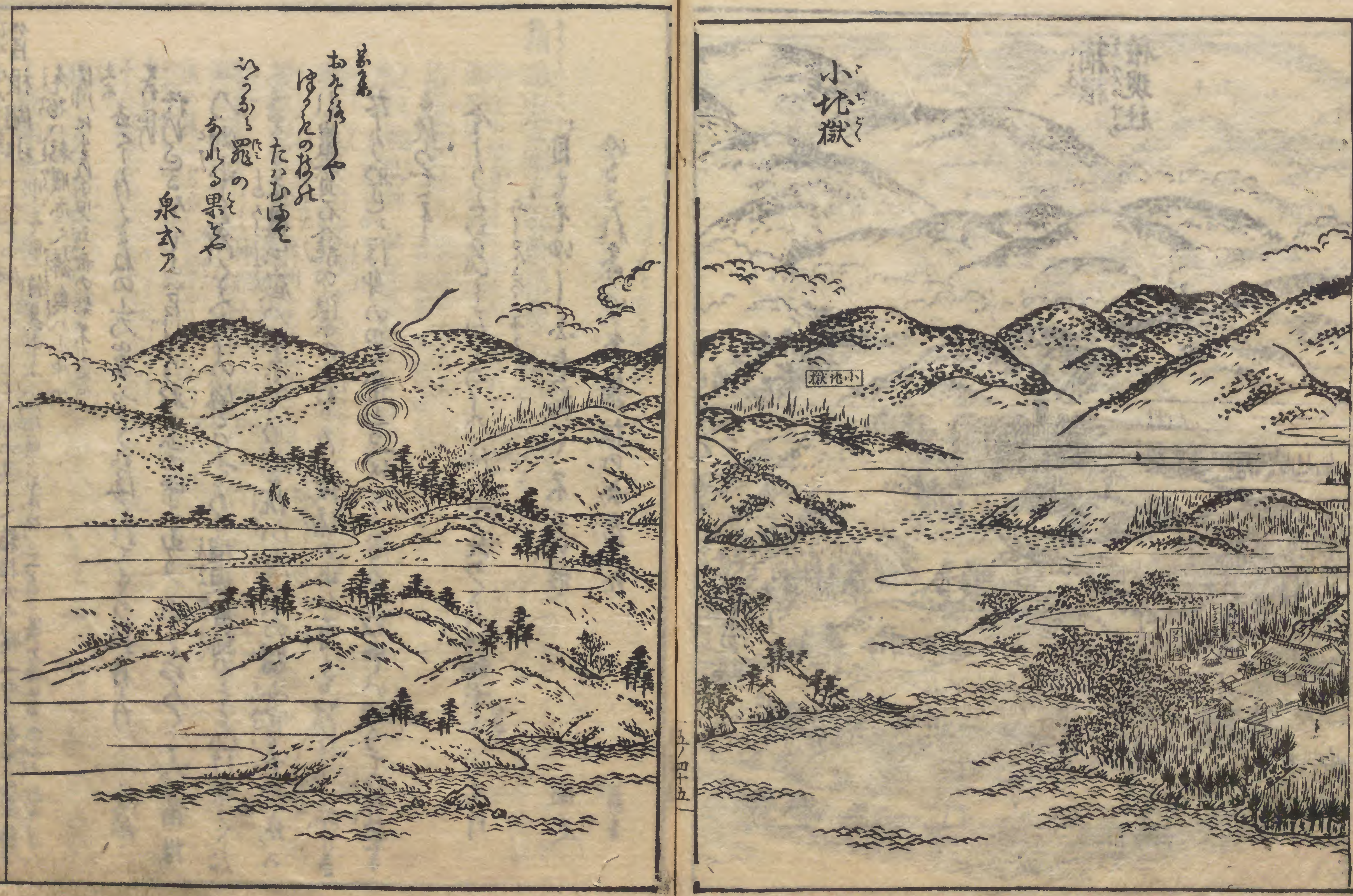
捨る様にもおくらぬ関路のかよひ哉　斑竹

甘酒ともとは仙家や壺をみれ　露菊

箱根湖水
西河原地蔵堂

箱根驛
御関所
箱根驛

箱根権現社
湖水


小地獄(こぢごく)
小地獄
玉葉
あさましや
けんのえだの
たはむまで
いかなる罪の
なれる果ぞや
泉式部

箱根湖水　一名芦の湖といふ。冨士八湖の其一也。箱根の山嶺にあり。長サ三里弁
巾壱里余。其中に、石尾崎。ほた沢。三ッ石。猪ヶ鼻等の名あり
産物は鰍・腹赤・鱒。魚は山中の
渓川に生ず。小児五分箱の始業に用ゆ

夫木
玉くしげはこねの山の峯ふかくあら海をれてそ見る月かげ　文融

東の紀行
行かゝるかにはまに箱根山の中にふりてみづうみあり。箱根の湖とかや。又あしの海ともいふ。すなはち権現垂跡のところといひつたへたり。朱楼紫殿の雲にかさなれる粧ひ、唐家の驪山宮をおもひあはす。巌宝石龕の浪にのぞめるけしき、銭塘の水仏寺もいひつべし。たよりあるべくは浮身の行末をもいのりて法施をまゐらするにぞ

今よりはおもひそかれしあしの海のふかきちかひを神にまかせて　光行

目もさゆし出雲動く不二の形　蘭更

ゆるされて身も咲く箱根の女郎花　蘇老

箱根山を越る日みやこの友に申遣す
わすれずば小夜の中山にて涼め　無村

箱根山金剛王院東福寺　箱根山にあり。古義真言宗。箱根駅より新屋町、葭原、當三ヶ所を過て西の河原といふ所あり。ここに地蔵堂あり。湖邊に讃岐多し。右に尉が嶋あり。音妻川の南に屏風山、小山あり。駒ヶ嶽権現坂より元箱根に到る山なり。山際にて雲はかゝり雨と晴との幽境なり

箱根権現社　祭神中央彦火々出見尊　左瓊々杵尊　右木花開耶姫命　例祭六月十三日

末社　駒形神　能善祠　高野祠

獅子巌　行者堂の御供所石段の側にあり

親鸞聖人堂　門内にあり

行者堂　役行者は安置。側に弘法大師の堂あり

薬師堂　石段の下にあり

本社の右にあり。弘法大師と安置。阿弥陀観音は安置

此所にあり此聖人東国経回の時此所と通りて其夜の御託あり。其時日明朝門前と貴僧来往あり。郷しく饗應をなし、神託に任せて御所に此聖人を請じて饗應ありしかば御所へ祭神の奇特をかたりて謝す。その御縁を謂ふは又鉄(?)をもちて曽我兄弟の霊を祀る。又錫杖大会は宗の時ありて別当泉龍寺の御堂に湖水の中に蔵す。六所権現、地蔵堂等ありて当山の初は聖占仙人幽居の地にして神威と崇め寿齢九百餘歳に及ぶ。それより孝安帝の御宇に湖水の中に目代本を建て相互に駿三国の境とし、欽明帝の御時より韓国の高根権現を勧請し此山の形梵篋に似たれば

とて筥根山と号け湖中の怪石は観音巌といひ又一宇は建て普門品は誦れ今湖中の堂嶋あれし處后役小角も登山し行基大士も昇臨して東福寺と號し山岳林泉に名境多くして都率の内院に表して四十九所の名に擬らえ天平勝寶年中に満巻上人鹿嶋明神の神勅は蒙り錫は止め当山に練りたる事三ヶ年此時箱根三社権現は崇て上人は中祖とし諸経の讀誦一万巻に及びられ夫より爾已来諸人満巻上人と崇ぶ又湖水の西乃渕に九頭の大龍有て時々風波を発し人民は悩す上人此渕に臨んで神呪しければ毒龍水上に現ず即鉄鎖の呪縛して大樹の下に繋れ永く当山の守護神となりん事は誓る（此樹は梅檀鬱木といふ）今の湖中にあり 弘仁七年より万巻上人勅は奉て上洛し帰路に到りて三刕揚那郡に於て入寂は従弟遺骨は当山に蔵め佛像経巻ハ至州田方郡に一寺は建てられ納む是は桑原山新光寺といふ又の名は小箱根山とも号は其後孝謙天皇より後嵯峨帝まで七代の帝王尊敬有て神社佛閣巍然たり弘法大師慈覚大師もこゝに止錫し花山院の皇子豊覚法親王当山の座主職に任ぜしは此時金剛王院の勅號あり此法親王の御弟子安慶当山の別当は勤む同弟子行實僧正もこゝに來て別当と成武門にも田村将軍。源頼義。右大将頼朝。小條時政。義時。泰時もみな尊恭し曽我兄弟祐経は討し微塵丸薄緑の名刀も後に頼朝より当山に寄附しあひて什寶となる其外寶器多し時去星移て小田原陣の時兵燹に罹つてむかしの十が一にも及ばず桑田碧海須臾にあらたまるの謂なるべし

当山名所四十九所

宮浅山　薬師ヶ嶽　狐塚山　精進川　不動石　御車石　浦嶋桜　相模津　伊豆津　菜池

鶯ヶ嶽　臺ヶ嵩　兆出山　諸佛川　馬乗石　踏石　鴾の桜　懺悔津　枯津の池　阿字池

駒ヶ嶽　飛風嵩　挑灯山　琴川　馬牢石　目代木　楊枝木　駿河津　血の池　蜂ヶ池

寶蔵嵩　二子山　佛供山　三途川　五条石　伽羅木　古松　白川津　桃子池　蓴の池

明神嶽　大庫山　地子用　吾妻川　福徳石　大文字松　室津　花川津　精進池

東鑑曰

奉レ寄　相模ノ國早河本庄　筥根權現御神領事

右件ノ御庄者為ニ筥根別當沙汰ト早ク可レ被ニ知行一也

寄進ニ於ニ御庄ニ者前兵衛ノ佐源頼朝為ニ沙汰ト所ニ

書ニ以テ申也全ク以テ不レ可レ有ニ其妨一仍テ為ニ後日ノ沙汰ノ注ス文ニ

治承四年十月十六日

同書曰

安貞二年十月筥根山ノ神ノ社擅佛閣焼亡ス當社垂跡満月上人草創以後五百餘歳未タ有ニ囬禄之例ニ北條ノ武蔵守泰時頻ニ歎息ノ潜ニ有ニ解謝之義一被レ棒ニ願書ヲ仍テ造營ス十二月二十八日遷宮ニ

神社考曰

伊豆箱根ハ者。本社彦火火出見ノ尊也。又有ニ駒形權現。白和龍王。右鵲王。左鵲王及ヒ客人ノ宮。雖ニ又有ニ役ノ行者。吉備ノ大臣。弘法。慈覺等ノ遺跡一

箱根温泉　七箇所にあり七湯巡とて箱根權現坂は街道に標石ありこれよりたの方へ

○**生死池**　標石より六町にあり。**頼朝卿状書石**　此石によりて状を認めたまひし由をいひつたへり

○**薺の池**　に塔あり　此池の傍に鎌倉比丘尼の元西河原石地蔵　池の側に自然石に地蔵を立あり長き丈余弘法大師作りしなりとぞ。多田満仲石塔。十二光佛石像　共に地蔵尊の次々あり

○**曽我兄弟石塔。虎御前石塔。庚申塚**　草叢の中にあり土人云曽我又は虎か石塔なりといひ又一説に元の所へ寄するといふ

△**芦之湯**　七湯の其一箇にて權現坂より二里そ湯屋八町の中にあり一二三と住坂にて入湯れ氣味淡く苦し又硫黄の気を帯し濁れ湯にて黄色なり効能は癩病　黴毒　五痔　一切の瘡物に相應して早く治ん浴客の逗留例より長き許入湯の宿舎ありて奇麗なり

○**小地獄**　芦の湯より八町許にあり山の腹に湯氣盛ん立て手足入るべからざると熱し　按するに積陰鬱聚りて火気をなし生し土粒熱して硫黄となるもあれ温泉の源なり土人云湯治客の地獄　酒屋の地獄　紺屋の地獄ありといふ地氣おして色変ることあり山奥五里許にも大に地気を昇る所ありとぞ聖議にあれば大地獄といふ

△**氣賀湯**　芦の湯よりまれまそ壱里あり此間に中は岩湯上湯　平の湯　大瀧等の四ヶ所ありいづれも氣味　硫黄に似て明礬の香あり中風　癪氣を治す

△**底倉湯**　氣賀より半里中むかし地震にて石梅名風悉く絶て今は内湯二三ヶ所あり此所の民家箱根名物挽物細工を業とす

△**宮下湯**　底倉湯より弐町ばかりそこに大黒屋家續き内湯就湯あり温泉の水脈より通して家々にあり入湯は就湯ともに通はり賃によりて家の内にて滝のごとく温泉を落して打たする頭痛　疝気　痔腰の痛を治す折うてて気味快きものなり

△**堂嶋湯**　宮の下より五町ばかり山下にあり内湯　就湯あり氣味醎くして積聚　疝痛を治すなり

△**塔之沢湯**　堂ヶ島より壱里半あり七湯の中にて地境広くして風景の勝地なり山は勝景山と号し川と早川とぞ

いざよひ小記
あれ山路の湯坂にこえて見わたせは志ほ木流る早川の水　為仲
橋は玉緒橋といふ水戸黄門光圀卿明人舜水と共にこゝに遊ひ
此号は名づけて便せる浴舎殿ありて廣く書院数寄屋庭中何れも
佳景之江府より諸侯時々こゝに湯治しぬ又湯は秋山弥五兵衛一之湯
は小川氏太衛門内湯ハ田村久兵衛蔦屋喜八喜平治小兵衛等なり
都て家数廿三軒あり此温泉ハ氣味
軽くして養生湯なり諸病に治れ

△湯本湯　塔沢よりこゝまで十町あり町の中に浴屋ありて四間に仕切此
湯も二三ヶ所あり疝気瘡毒癇病の類によしこれより三枚橋へ
五町許あり此と歩て橋の東の流へ
わたるこれより箱根道東海道へ

箱根山温泉記

相模国箱根温泉ハ白山妙理権現立せ給へる所なれハ其神力ハ
くは諸病悉除のきこえたかし此湯に入浴する人息災延命の楽保これハ
とゝ本事なし此湯本ハ小田原の面十里はかりの所山迷ニ水清くあり
代も動きなれ岩根にうつれ千世も兼ぬぬ松むしこえて棒に放光堂
あり運慶法師の作れる地蔵井は安置し三世界度衆生の誓ひなすて
くおほえ東に三枝橋とて岸のかたはらの小原寺ハ富士岩根たかく其上
より時しらぬ雪の不二の根ほのかにみゆるまてかんかせけたかきもし心を塔の嶺西に媒
おそて其本に涌出る湯谷あれハ景目と悦ひし先心はるかにむかし素湯に
養性の所に叶ふ後乃妙理権現ハ天地ひらけしはしめて女神あらはれ
初中のいさなきの尊にておはします垂跡十一面観世音にておはしますのち
都元正天皇の養老年中に泰澄大徳越路の白山に詣て修行し権現
示現あり我は信敬のをたての願とかなへ給ひと除れ我かちは
見とも宣ひて九かしらの大蛇に現しおはしまして十一面観世音菩薩
妙相端厳にて拝まれさせ給ひぬ泰澄威儀を具して時いう機應して今
かくいはれし見ことも汝涼にて見むかたとてもおはしまします願は像法末法の衆生
に大悲は忘れくおはしまし世に申させ給ふ名は弁金冠は
動しられはきゝを引出つえ霊験いちゝるしく聖武帝の天平八年に疱
瘡のえやみ有て上中下此まさらひにうつらさるはなしけるより泰澄に勅して
十一面観音の法を修せしめ給ふに五歳の内ハ流に其まさりひとまぬかるもし

といへり猶あこがるゝ事ありて足にまかせ関の東にいかの光を尋ねありきしに
泰澄の神足浄定坊といふ者こそ有し卧行者は此の国に浄定はわけしてのち
にわかに湯わき出しを掘せしむるに土の中に此あたゝかなる事の天平十年に浄定は此所
御社を立て白山権現を勧請し十一面を并て又十一面の本尊を彫りひらかに
此山の岩根忽ちに裂て温泉涌出で長く諸人の病を治しぬ九百四十余年
を経て今の世まで来る都 後柏原院の大永の頃かゝる小田原の氏綱の此
特賜正宗大隆禅師とむかへて此地に早雲寺を建てその温泉のゆかりに
春の頃にふる事を愛して浴室を其ほとりに開きてまた金湯山となん
中頃久しく此湯寺は此寺に属せしを此寺おとろへて後久しく成ぬ凡百年にも
あまりぬる事の久しけれは此里民の家居もかたわらに建て世の人埋木乃
人のしる所となりぬれば此湯の事しかる事をも語りつたへきたりし伝へ遺
道人来りつゝまた此異利ともなふによりて家潤ひ里富つゝ今の繁昌湯の名
小そをひて猶人此ちまちに成ぬるに天刑の病人のわづらひもきえしとかや此湯

変じて水ところとなりぬ人毎年湯の口にまつり此湯の霊にまつりでしるの
ありぬ十近き世男に湯并あはしと云てしか此あたり遠く久しくなりに至りて此里を
也其地をひら山と湯坂といふ今の津の国に有馬の出湯は三輪の神大己貴の神はじめて医王
善逝の勝地也此国の湯本の湯は白山権現の垂跡観音応験の霊区とかく
いふとも其の枯魚はよみかへし飛さて豊かなる所のみぞかの国の主にしはてし
目白の光の宮にかへりたる事をかしく称する也彼驪山の温泉は秦皇の瘡を
いえんとて神女の出るといふ伝へなり此国の[illegible]
日々にちかふ[illegible]生青は[illegible]陽徳の神そ[illegible]
観音は慈眼とそ衆生をみそなひて[illegible]の海浅からぬ[illegible]神徳へ
此湯の流のとうあれと[illegible]
永禄の二十とせ霜月の三日湯の[illegible]新玉津嶋の
七松子の筆はやりて新に志侍る

湯湯新玉津嶋社は五條三位俊成卿の宅地の[illegible]七松子は永禄
中の社司也[illegible]延宝貞享の頃人小村[illegible]此社司を勤え
[illegible]書[illegible]註解[illegible]の師也

箱根七温泉の中に
塔澤ハ殊に山水の
風景之風流あり
房を並べ内湯
多く温泉は貸に
ありて瀧湯に
して肩膝腰
など痛める所を
うたせ湯くすりとなる
湯槽に浴しても
昼夜流れてゆく
清き事泉の如し
其間々に糸竹の
楊弓軍書讀の
座敷湯の興あり
煙草をも
みな
書生の

一ノ湯
鬼のない
地獄から
わく
箱根の
湯
やはり
なされ
ど
極楽と
ある
軍書講訳

箱根名品挽物細工　街道湯本村にあり挽物の諸品は細工して色々彩り巡て

旅客に携る又雛の芥子人形の細工は美しくして巧なるの

箱に百品五百品を入れる　湯本伊豆屋の店諸品多し

又紋哉に流しの枝た右へ八九間も延びる梅の名木あり

○権現坂より本道ハ珠不見坂　老ヶ平　右に大庫山　左に二子山見ゆるなり　飛石坂

猿滑　根散坂　畑本陣の茶店　寄蘇之大原坂　割石坂　南に三所山小さき鷹巣

山といふ女ころびしといふに大石あり　須雲川これ小涌の文城の詠あり　右の方薬師

の瀧　猿滑坂　葛原坂にて　利の方に葛原より此の方に丸山見ゆるあたりに謎挿石

あり　観音坂　新道坂　地上乃坂これより湯本巻に至る

南に新宿権現小さき地蔵堂　曾我祠　芭蕉の句碑あり

函関七律

関門百里倚龍嵸　十二東秦車轍通

天色幾餘黄霧外　人家半住白雲中

湖分銀漢星辰湛　峯並芙蓉氷雪同

一自終軍棄繻入　于今士氣此間雄

勝次公

撫子本で其名を流す

政の巌刺あるといはし

源代の垂にめへ

根しく強る重さや梅の花　蕪村

ちなみに伊豆屋より出る

箱根の挽物店を見て

こりやこりや玉子箱根の細工哉柳梅子桔梗萩萩　九锂

ひろくの細工の河原へ地獄遠見たゆうに関門　貞一

金湯山早雲寺

湯本村にあり 禅宗 済家 金湯山の額朝鮮雪岑筆 方丈の額同筆

佛殿釋迦佛 開山正宗大座禅師 本願伊勢新九郎長氏 永正十六年建之

北條五代墳 寺内にあり

宗祇法師墓 境内にあり 又傳に今小路通三の墓也

北條新九郎長氏後名早雲 伊勢平氏の末裔にして桓武帝第五皇子葛原親王の末孫平清盛の後胤之相州小田原の城主として菩提所を建営し其後諸堂壮麗たり長氏故ありて國を領し剃髪して早雲庵宗瑞と號し九十歳まで存命し此寺に葬る其次氏綱其次氏康其次氏政其次氏直まで五代の間関八州を領し皆此寺に墳墓を築く

覽箱根貝葉作

諸聖悲羣衆 捜扶死生源 有身諸患本
七趣爲樊園 受身何所縁 靈識是其根
識質相纏繞 萬苦不堪論 飄揚同野馬
騰躍似囚猿 不驚三有夢 何酬諸佛恩
縱聚河沙福 欺魄耦迷魂 雖説精眞道
無殊酣醉言 琅函如丘陵 須知要領存
食息警遺忽 潜思歸至尊

江陵 萬菴著

早溪

湯本三枚橋より塔の沢の下流をいふ此流早川の瀬にして頼朝に三百騎にて引く して早川尻小陣にて是より早川堂が島へ軍勢をくり出し湯本の方より敵山に高えて中に入これ返ば申しまさんとするといそれより茶嶺石橋より入所小陣はくなり手盛衰記にいく鎌倉の謀甲斐参議中将範茂は小条朝時と相模て瀬倉へやそて此早川尻にて水中へ沈めて空しく成りぬ文永弘安の頃泰範朝臣は此下にて斬し 本太平記にもあり

長興山浄泰寺

入生田村にあり 又入生田ともいふ 書は此辺より

佛殿阿弥陀佛 小田原石出る 禅宗 黄檗派 恵心僧都の作座像也 許開山鉄牛和尚 本願八稲葉 僧之禅堂 食堂 照堂 牌堂 鐘樓 客殿 春翁 輔廟 等厳

重々門内より石階を登る事三百級 此より遥に見わたせば江之嶋鎌倉辺みえて風色殊に勝れり

豊太閤御陣所

入生田の東風祭村の背石垣山之天正中小田原攻の時豊臣秀吉公の陣所也 字を天守臺といふ又塔の尾と云所に蒲生飛騨守の陣所あり

石橋山

小田原の入口より壱里許西南にあり海面遙々と遮て風光ちら〳〵治承四年八月兵衛佐頼朝に大庭三郎景親と合戦しの大戦場なり

東鑑大意 治承四年八月廿三日武衛頼朝は石橋山に陣し平家方大庭三郎景親三千餘騎を引率して競ひ駈る武衛は之に免れ給ひて後の峯に退き給ふ

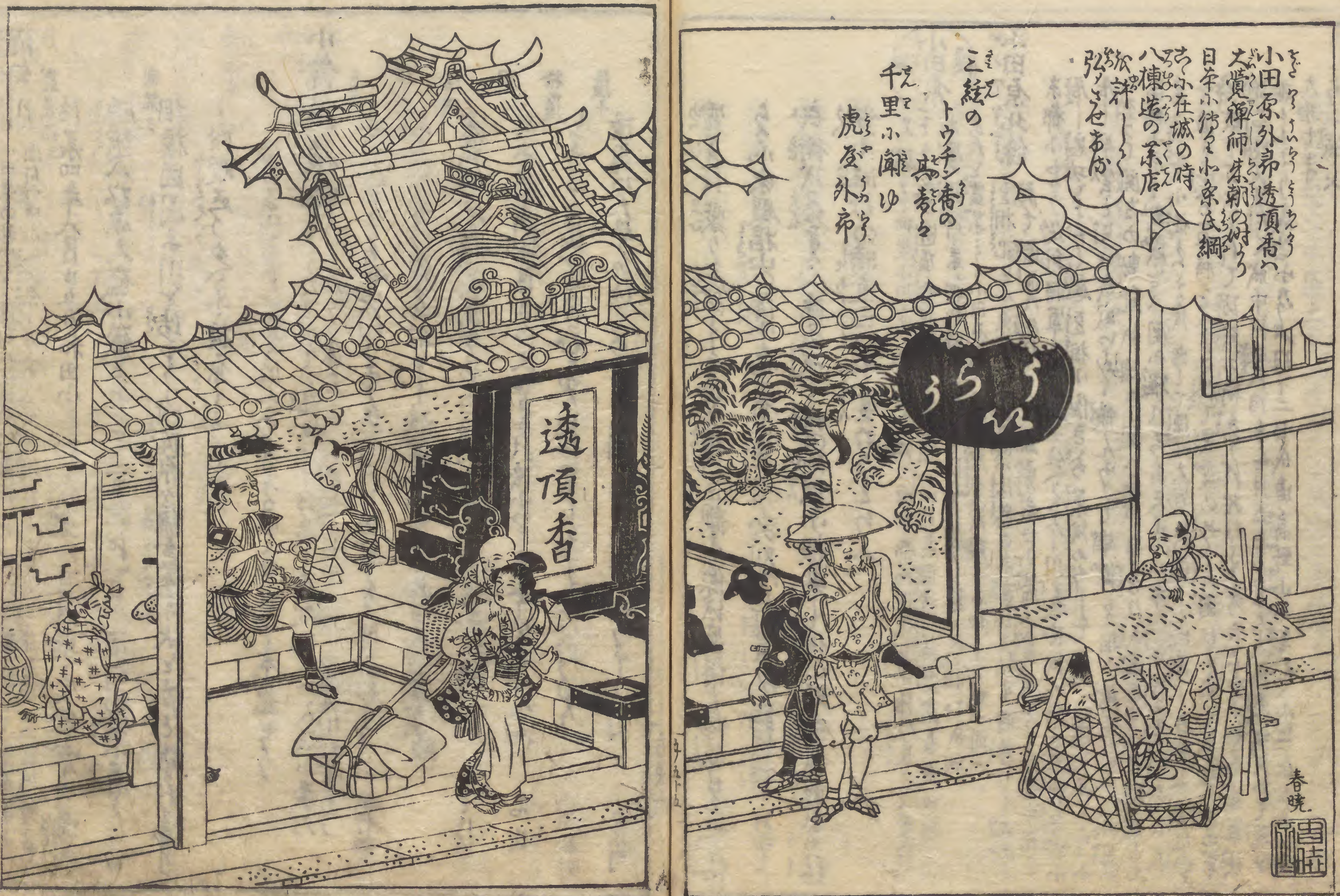
間に加藤次景廉大見平次實政武衛の御後に止まり景親を防ぐ
北條時政は君を諫奉りて數町の險阻を凌ぐ處賴朝には節上の
中に隠れたく實平時政等其傍に侍るを悦ずして實平ぐ各無為の
参しまれぞ喜びありとりてぐしく人數を卒せしめあら此所に隠れ居る事
叶ひ難し御一身に於ては縦旬月を歩すといへども實平計略を加へ隠し
奉るべしとて北條四郎は箱根湯坂を經て甲州に赴んとす北條三郎は
土肥山より桑原に降り大庭景親は武衛の跡を逐て山谷を捜求る事
急也時に梶原平三景時といふ者ありて慥に御在所を知るといへども有
情の慮を存じ此山に人跡なしとて景親が手を引て傍の峯に登る
る此間に武衛御髻の中の觀音の像を出し巖窟に安じまゐらす實
平其意を問奉る仰に云首を景親等に傳ふるの日此本尊を見ば源氏の
大將軍の所為なるよし人定て謗を貽さん件の尊像は我三歳のむかし
乳母清水寺に參籠せしめ嬰兒の將來を祈る事懇篤にして二七箇日を歴て

靈夢を蒙り忽然として二寸の銀の正觀音像を感得し歸敬したてまつる所
なり小早河殿箱山の陣に參着し箱根山の別當行實貯餉を持しめて
武衛を尋ねる所に除を咲て將の御前に相具し件の貯餉を献ぜしむ
餓に臨むの時直己に千金なりとぞ

相模 小田原

小田原北條

大儀まで四里小田原 北條氏綱の時京都西洞院錦小路外良といふ者此藥
下り家方透頂香を製して氏綱へ献ず其由緒は深倉建長寺の開山
大覺禪師来朝の時供奉し日本へ渡り家方と弘む氏綱
されど靈薬として小田原に八棟の居宅を賜り名物として世に聞ゆ
豆相記に云小田原新九郎長氏は源盛の末裔なれども時移つて匹夫に
降て漂泊し給ひしが謀勇武世に益へ奮然として備中國より
京都に上り足利將軍義政公に仕へ今川義忠をたのみ高國寺城
に居し忠功をとげ豆相に働きしが策をめぐらして小田原城を抜て
居し早雲と号す武威いよいよ熾んにして雄偉豆相に振ひ其へ三代氏康
に至りて關左の動乱を鎮め關八州を併呑し氏直に至りて五代相續して
當城に居し武威を八關に耀れけるに天正十八年の春豊臣秀吉公
氏直の公命に從はざるを惡みて速に大戦を催し出陣し石垣山に屏風山
本陣と定め軍將を八方に備て雲霞のごとく囲む北條も東八ケ國の軍
勢數十萬を入れて防戦の術を盡せども秀吉公の下知にて諸軍
鉄炮石炮を放ちて城中を攻め同年七月五日氏直城を出て罷と
謝しより氏直高野山に移されて小田原北條五代
九拾七年
にて滅ぶ


小田原外郎透頂香ハ
大覚禅師来朝の時より
日本に伝ふ北条氏綱
ちて小在城の時
八棟造の薬店
旅許しく
弘メさせあか
三絃の
トウチン香の
其音ゟ
千里に聞ゆ
虎屋外郎
透頂香
ういらう
春暁

酒勾川　小田原の北にあり酒匂は相模川の下流をいふ又一名鞠子川ともいふ小田原と酒匂の中に山王原といふあり星月御井上宮あり三浦荒次郎の霊社なりといふ

盛衰記云

治承四年八月廿五日和田小太郎義盛三百餘騎にて鎌倉より稲村腰越八松原大磯小磯を打過て二日路を一日に酒匂の宿に着と云

同記云

相模国国府川を渡りて一時梶原が鎌倉屋に水とさけと跳けり奉り一時眼前にあるに梶原ともあれ

さかは川あまたの波をあつかるなと申せし事ヲ記せり

小餘綾磯　酒匂より大磯までの磯辺をいふ下方角抄にハ大磯小磯乃ゆるぎと記せり鎌倉志にハ腰越と七里濱との間にありと記せり

古今

みそれのこゑやらいりよまたきのいその波か沖にあるかり　敏行朝臣

東大歌所

こよろぎの磯たちならし磯菜つむめざしぬらすな沖にをれ波

後撰

ころもでのいそによするのうらはの人もかへりし　そせい

同

よそにのみ月日をすぐすこよろぎの磯にてぞいまはならべん　右近

拾遺

いそぎてくるとこそきこゆれこよろぎのいそれおてもかひなかりけり　小弐命婦

続千

陸奥にありといふ関こゆるこよろぎのいそぎのいそうさう　小野小町

新拾遺

こよろぎの又そのひまもゆるぎのいそそ法の舟とぐ成けり　依子内親王

まん木

鶴のすむ松も老せて行きの夜の蛍さくらに世をそ祈れ　能宣

同

こゆるぎの磯乃松風音されハ夕波ちどりこゑさわぐ也　土御門内大臣

きのふたちけふゆるぎの磯乃波いそいでゆけん夕暮の道　北条氏康

曽我里　酒匂川の東小八幡より廿町許入る曽我中村といふ曽我兄弟旧所も山中にあり

川匂神社　二宮村にあり延喜式に餘綾郡一座とあり今二宮明神と称し例祭五月五日

藤巻寺　同村にあり梅澤山東光寺と号し真言宗也堂前に古木の紫藤あり故に其名あり

鹿　松　同村松原にあり由縁詳ならず

吾妻山　御道の左の方武町にあり山上に吾妻権現祠あり

相模国府蹟　今国府新宿といふ所是也左の方に六社明神蔵王権現あり

日蔭馬場　今国府吹切といふ左の方二町許に桜馬場あり是と日かげの馬場とよびて小栗判官照手姫鹿毛といふ名馬を試し所といふ

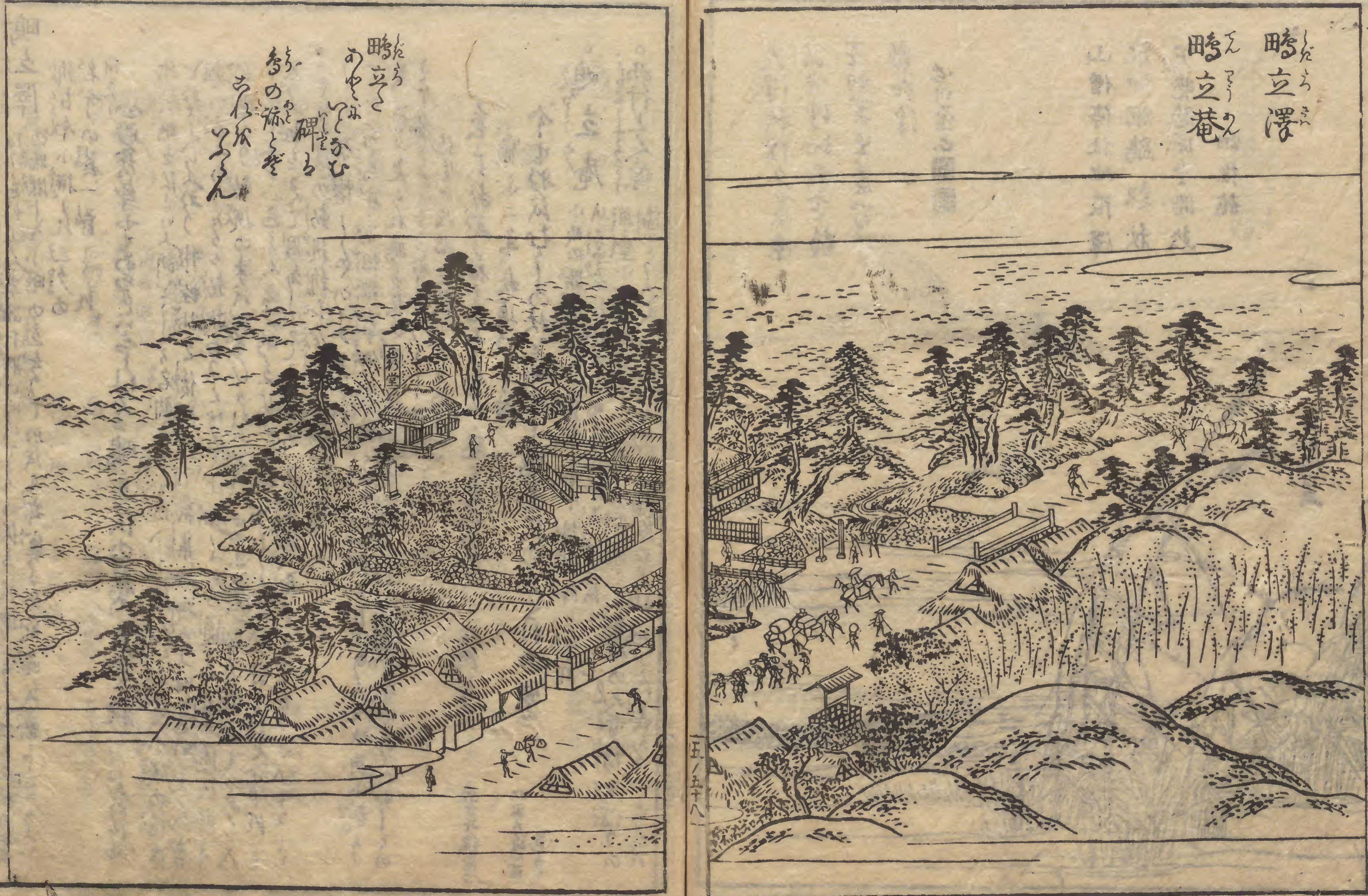
小餘綾社　六社明神の末社也中宿といふ所にあり毎年五月五日

切通地蔵　此所の道狭くして山間を切通して御道とせし故切通といふ石仏地蔵は行基の作といふ長五尺許

秋暮鴫立澤

大澤秋煙夕景涼
只古灣招飛空鷸
在羽暮生蘆有
鷸池津
古川亞太 [印]信 [印]原

山僧停杖地限澤
水如烟鷸起秋
天晩悲風全渺然
畑維龍



鴫立澤
鴫立庵
鴫立て
おもふはむかし
碑を
鳥の跡とぞ
古行いふらん

鴫立澤

西行上人東路行脚の時此沢を通り給ふに折から秋の暮の物淋しき小鴫の立ちて哀れも弥増す風情は感じ詠み給ひしとなん
新古今に撰まれ三夕の名哥の其一首とかや

新古今
心なき身にもあはれはしられけり鴫立沢の秋の夕ぐれ　西行法師

然れハ鴫立沢といふ所を名所となしたるハ後人此大礒小礒の海浜と推量くらるゝなり 此抄に俊成卿千載集撰ばれし時西行法師吾妻の方にありしが勅撰のありと聞て上洛しける道にて登蓮法師に行逢ひ勅撰の事を問ひければ早撰まれ侍る由師の御哥も多く入りしと答ふ 西上人この鴫立沢の哥やいりたると問ひければいらずと答ふ 然らば見ても用なしとて夫より又東路へ取てかへし下りたまひしとなり 其後の勅撰新古今集に撰ばれしとなん

○一とせ飛鳥井亞相雅章卿勅使として吾妻に下り給ふ時此所に到り鴫沢をとへられ鴫立沢の跡とうたがひて所の者に案内させてまつのかげにて其ことをさぐりしられしとぞ

弥生の比鴫立沢にうつりて
哀さは秋ならねどもしられけり鴫立沢のむかしたづねて　飛鳥井雅章

寶永二年秋通りかゝる時
今もなほむかしの秋をとゞめてよ鴫立沢の夕ぐれの空　松平右近将監 邑來

○鴫立庵　小礒の駅舎にあり 寶永年中俳諧師三千風此草庵を結んで鴫立沢の古蹟とす

○西行上人像　草堂に安す 相傳ふ上人六十四才の肖像にて高雄の文覚坊の作りしの像とかや 又西上人の松月色紙并に什物とて真跡なりといふ人あり

○虎御前像　草堂に安す 十五歳の像 大礒の虎みづから彫刻しけるとかや 後人作りて茲に置くなるべし 側に東鑑の文石碑ありて立

○鴫立碑　此地開きし時三千風これを建る 銘文もいと長ければ三千風が芳志は感じてこゝに載る

銘曰

心なき　身にも哀れ　あはれなり　鴫立沢の　秋乃夕
若とよみける　われなんの武士　のりきよ乃　からおちて
法師の身ハ　西ゆく名此　あらし小や　俗名行道　いみじくなる
見ぬ世の旅乃　門いでゝ　命なりけり　佐夜の山　浮世乃山への
うつりゆき　風小なびく　かしの杯乃　名つとなりぬ　身の老を
あくる箱根や　あはれこそ　いそけしと　なちゆく　その手の鴫乃
沢水乃　白やなれや　新古今　三の夕乃　名ところは
清く涼しや　われ其所　いたゞる雅章　鴫沢に立て　おしも春の
あつれさハ　秋ならねども　しられけり　鴫立沢乃　澄秋中く
我もあんこの　君松や　日より向ハ　その人も　嵐のまゝに
高みよくも　飛花落葉して　その沢乃　あまた残り　さちなりて
見る名高雄の　ちんらくの　なを縦りて　みるい堂　わすれ神や
庵あ堂　猶五常之法　わかれせし　宗雪居士の　そこ所
吾方は去ふ　表祭しと　論に依り　あかれ又　田島集に
国くの　詩哥連俳　行の名残り　五百年来　たむけまで
満願せしは　我国の　いせの宮への　友集人　施入は形で
なのきや　心なき身の　まいり　道ある人を　まねしやる

元禄十三暦辰二月望日　東往居士三千風誌之

相模 大磯

虎子石

平塚まて廿七町は砥山より盆山石ある茶店に出してこれを賣る家多し 中延臺寺に有る當寺に取 此石の縁起あれども詳ならず

十郎慷慨愛於免血氣武人犀甲躯
妾婦當時誓星否隕成此石似望夫
羅山子

三社権現

高麗寺村にあり宮寺は鶏足山高麗寺といふ
開基は文観僧正也 例祭六月十八日 此所の生土神なり

祭神忍穂耳尊

社傳云むかし神功皇后三韓退治の御時高麗より神威を耀しく平定有て神霊三韓に止りぬ人厭后と崇めなすられけり又伊豆御山へ神幸ゆりしくありある時大磯の浪間に秋々光ありの伊豆山の松葉仙人これを見て大磯に来りて光の本はさくりあとへ圓形三尺ある面の神像は得より其後霊瑞ある事かれば伊豆御山にうつしまつる 松葉仙人は日金嶽に庵を結び給ふる高麗寺と号し唐ヶ原の名もありしもありしが故ある唐ヶ原は鎌倉之次下にみえたり

花水橋

高麗寺村にあり此辺より富士山よく見ゆる風景よし

驛馬進蹄行一路 野絆浮鼻入前墟
遨遊眼豁海山景 雅畫人過花水橋
崎闇齋

相模 平塚

八幡宮

藤沢まて三里半
八くさ村にあり別當は鶴峯山等覚院といふ 例祭五月五日 社内より大山不動尊への道あり

馬入川

馬入村にありむかしは相模川といふ水源は甲州猿橋より流る此辺の大河なり
又俗傳に建久九年十二月稲毛三郎重成亡妻の追善のために相模川に橋を供養す此重成が妻は北條時政が娘にて頼朝公の御臺政子の妹なりければ右大将御結縁のために渡り向ひ帰らせ給ふ時八的が原といふ所にて義経行家が怨霊を見給ひ又稲村が崎にて安徳天皇の御霊現れ給ひければ是を見て怨に気を失ひて落馬し給ふ供奉の人々驚き御輿に乗せて御帰館ありて遂に御悩ありて医療術を盡させ給へども更に其効なし其年も暮て明る正治元年正月十三日終に逝去し給ふ御歳五十三とぞ聞へし征夷大将軍正二位前大納言兼右近衛大将任官しあへまで猶て世を治め権を執り給ふ事二十年なりし御菩提は所以非の政を以て悲歎に耐へず聲はしてあし
一説には此橋供養の砌水上に怨霊出て黒雲舞下り雷電霹靂し其時頼朝公の乗馬しける馬は水中に飛入て忽ち死もしぞ故に馬入川といふと俗説ありいまに其の實録は見えざれば信じがたし

をを手記二云

相模入道高時の嫡子相模太郎邦時は五大院右衛門宗繁が妹の腹に出来たる子なれば甥と主と頼むかたじけなく深く憑れ深く隠し置たるが野心は懐んで暴しあし源氏の侍に討せて勲功を得んとおもひ船田入道に告て相模太郎の落行たる道を遮てぞ待たる相模太郎は入道に相待約束の隠れ家までも其比は正慶二年五月廿八日の曙に浦まりける毎に窶し姿にて相模川をわたらんとてさし守を待て岸の上に立たるを五大院右衛門宗繁が

てあれこゝせさへ作の介ハ数されハ舩田か郎等三騎馬より飛で下り透間もなく
生捕なる作の事にて張輿なども無れバ馬に乗せ舟の縄にて走くかにかれば
誡め中間武人に馬の口を引せて白昼に鎌倉へ入れなる是を聞人毎に袖を
絞らぬハなかりなりけり然ハ未幼稚の身なれバ何程の事か有べきなれども朝敵の長
子なれバ閣ことにあらずとて則翌日の暁腰に首を刎なる昔程嬰が我子を殺
して幼稚の主の命に換豫譲が貌を変ど旧君の恩を報せし其までこそ
無けれ五大院が心の程希有也不道なりと見る人毎に爪弾をして悪み義貞
実りと思ひかれも誅すべしと内々其義定て有けれバ宗繁偸聞てあちこちと
小隠れなるが多の悪の罪身を責るゝ事三界広しといへども一身を措に
処なく故旧多しといへども一飯を与る人無して遂に乞食のごとく
小成果て道路の巷にて飢死しけると聞へし

十間坂 馬入の東を里許にあり此所より昔土大山箱根右に江嶋鎌倉六浦金沢なとも見ゆる也十景坂ともいふ建武のむかし相模次郎時行三万騎の勢にて鎌倉へ発向し此所にて十七度戦ひ三百騎に討なされ鎌倉の大御堂にて討死しける事太平記に見へたり

大山寺 一鳥居

大山寺

雨降山大山寺　相州大住郡大山の嶺にあり真言宗修験道別当八大院其外坊舎十八院御師百五十餘宇又蓑毛村に十五宇の御師あり上方京師より参詣ハ当國小田原より左へ曲りて山麓蓑毛へ六里半江戸より詣ものハ藤沢の西四谷より右へ曲りて山麓子安村まで五里なり一ノ鳥居あり前不動堂まで十八町坂路の両側民家軒端つゞきて御師の家旅舎茶店あり是を名づけて坂路といふ此所より山上まで一万餘歩もあり前不動より本堂まで十八町男坂女坂の二筋の坂路あり岩石多くして嶮し難

前不動堂

奥不動堂　本堂に到れバ本尊大聖不動明王ハ僧正良辨の作座像長五尺人南面

行者堂　本堂の西にあり役行者ハ安置

鎮守　本堂の後にあり天照太神　山王　熊野　大黒天　春日　石尊　不動を安置す

白山祠　本堂より三町許上方にあり

神輿舎　行者堂の傍にあり

鐘楼　坂の路にあり大きさ寄進せられし男爵ハ鎌倉の末に寛永廿八年辛巳十一月廿日大檀那從一位左大臣源朝臣家光公と銘あり

山門　本堂の前にあり

二王門　下坂に

経蔵　二王門の傍にあり

二重瀧　本堂より二町許下にあり傍に龍権現祠あり

良辨瀧　坂路のうへ社の前山間にあり

新瀧　坂路御永町にあり傍に愛宕権現祠あり

大飛泉　一の鳥居より上方霞河原にあり

○石尊大権現社　本堂奥の院不動より嶮路廿八町にあり女人結界之処也諸人の参詣ハ常に禁ず毎歳六月廿七日より七月十七日

まで参詣を許して江戸及ひ近國近郷の群参夥しく道中筋大に賑ハふ本堂の傍ある中門より登山す

祭神大山祇命　神躰ハ巌石にして傳云昔日本武尊東夷征伐の御時此嶺上に勝軍を祈りし玉ひしにより石の武器を納め給ふ故に此山に石尊を崇め奉るといふ又聖武帝の時良辨僧正此山に登り給ひて開基ありしとなり

聖人相州小七ケ年継国の附あて小とりていひて此石窟小帰命し尽十方無碍光如来の十字名號を書しるし給ひ親鸞聖人の直筆にして八代蓮如上人の書写なりと云

末社　徳一権現祠　風雨両祠　大天狗　小天狗祠　石尊宮の傍にあり

寺説云　当嶺大山寺の開基ハ良辨僧正之（此僧正の傳ハ釈書に見へたり）俗姓を近江國志賀郡の人とありて当山の説とハ異なり大和名所図會に出せり此人の俗姓ハ相模國鎌倉漆屋太郎時忠の子なり時忠ハ聖武帝の御宇神亀年中関八州総追捕使として東夷を治む其祖先ハ大織冠鎌足公の玄孫にして鎌倉に在住し家富栄て一門軒をならべて盛んなりけれども齢四十に及ぶといへども家を継べき子なし時忠妻と語りていふ我家倍繁栄なりといへども未だ家督となるべき一子も持ざるハ是身一の悲しみなり且ハ女の身として子なきハ石女とて罪業深し諸菩薩の功徳何とて小跡なからんや特に観世音ハ勝れ給ふと共に常に

あれば念じ一子を儲ばやとて其より普門品を晝夜讀誦する事年あり
或夜の夢に齡八旬に丈の老僧香染の袈裟に水晶の珠數をつまぐり
右の手に鳩の杖左の手には一巻の経を持し枕上に立せ給ひ我は法華経普
二十五普門品之主れを誰とる也普陀洛山の教主之我は汝夫婦の者に授て
てわかき名のめぐ小笑ふ夫婦は霊夢を蒙り感涙して歓びよつて程なく妊身と
成て月を累て一男子を儲く夫婦の寵愛限りなし出誕の後二月ばかりに
赤子を乳母に懐かせ母は園に出て菜を摘れける其時雲中より金色の鷲
然として翔来りて赤子を抓んで虚空に飛ければ嗚呼哉といへど早雲に入て見へず
夫婦の者は天に仰ぎ地に倒れ悲歎愁傷腸を断ばかりなく去程に一子を喪ける
より家屋財寶益なしとて其儘に捨て共に何國ともなく郷を出我子に再び
逢んとて深山の峨々たるに分入巖を枕とし木實を糧として荒礒の凛々たる
谷に臥して浪の音に夜を明し年月を累て我子に逢ことを思ふての余
忽手に風狂のごとくあかしふ呻吟ありけれ陸奥の大隈川に至りてかくれん

みたらみおみくま川と聞ければ我もかけ儲をそこて流の音
紊れより東山道にかかり信濃國より住馴し相州由井里へぞ帰りけるに斯く
住し家も今は其形もなく壁落軒端崩れ門も朽て扉もなし見るに涙
もとどまらず又放浪として都の方へと志し流ぞし西海と渡り筑紫の果まで
さまよひ入て體は髑髏と衰て見る人に影もなく流落の姿と成にける或夜
夜の鶴叢の雉子の啼子も猿の聲の断腸の思ひ耐の身共に血涙をかへす一日
の根を求しく半日の齡の今日まで幾度をきかへす忽ちたちまちとも暮早
三十の年をかさねひたる翁も老驥の千里と思へども疲れは飢鷹の一睡を
まねける如し其頃南都に義渕僧正とて碩學宏德の名僧ありけるが或夜の事
なるに當来導師弥勒菩薩来臨の体と夢見給へば其早旦に春日野に到り
大明神に詣し其帰るさ大なる楠の枝の間に赤子の泣聲聞ゆ怪しく立より
見給へば金色の鷲嬰児を懐て巣中にあり斯て僧正持尊の不動尊を手
祈給へて一疋の猿来て其嬰児を懐て僧正に奉る即家に入り撫育し

より聴る名とは金鷲童子とぞ號る斯て年月を暦ほどに十九歳に
そ終りあひたる聰明清徹の神童にして他に及ぶ者なし然るに師の僧正ハ
年齢八十にして入寂しの後金鷲寺童奈ヶ果し其時此福の為に糸を
付る執金剛神の像を作りまう御足に糸をかけて引動かして禮拝
毎に唱て云聖朝安穏天下泰平興隆佛法利益衆生とぞ祈りたる信力
通じて忽御足より五色の光明を放て宮中を照したる　聖武天皇これを
奇として勅使をさしつかはされ光の元を見せしめ給へバ金鷲行者の許へぞ
尋入る勅使問て曰いかなるや光明王宮を照らし金鷲答て佛法興隆の志
願あり勅使此よしを奏達あれバ　帝大に悦び金鷲行者を召され朕も佛に
恭信の志ありとぞいまさ其師を求め行者を是より我戒師となすと宣
旨ありたれバ金鷲徳る薙髪して良辨とぞ申たる其より　帝の御帰依浅
からずして遂に春日野に東大寺を建られたる大佛殿と称じたる即良辨
別當職を蒙りたまひ是華嚴宗の濫觴と云後に時忠夫婦ハ西海に赴き

出て山城國淀の大渡に着て陸へ穿を頼て便船を乞されバ即船をおろし之
ら々國志ゝ々里の人も乗合たれバ思ひくに話る中に當時奈良の都
聖武帝の御戒師東大寺の別當僧正良辨と申ハ世に幼き時鷲の巣
より卸したる人とぞ承る今ハ　帝の御帰依厚く世の聞えも例なく時る
とぞ語りたる時忠夫婦これを聞よりも胸騒ぎ急ぎ船より下りて奈良の
都へと尋たる其跡の寺社を巡礼し偏に我子に逢せ給へと祈念をかけし二人を
あらにも其ハ坊も情なれバ身疲れて東大寺の南大門の傍に二本の杉の木と
云老葉を纏て悩煩ひたる其頃僧正良辨参内のかへるさ此老夫婦の方より
光出て良辨の車を照したり僧正怪しと問せたまへバ我ハ相模國の者に一子を
鷲に掠れ餘所をかへさのままに三十餘年其坊情と尋ねあひあはれとも今に申れ
其誕生の年月ハいかに夫婦答て其嬰兒の守袋にも記せるごとく慶雲二年
乙巳四月十五日と僧正これを聞て扱ハ我父母なりし且ハ歓び且ハ歎き二人
共に御車に乗て御館舎へ伴ひのち其ハ貴賤これを傳へ聞て袖を絞らぬ

こなかりしを　帝これを聞て感涙を催しゆへ則詔有て本領安堵の官
符を賜ふなれは相州由井里にむかしに変る館を造つて遠近の親族
聚りてむかしの春に遇ありしていと賑しきぞ見へにける良弁僧正も
故郷なれは相州に赴き給ひ由井より西の方に當て高山あり其山
嶺より霊光赫々たり即僧正登山し土民を聚て大木を伐し山石
を穿て高峯に至り光の元に到り給へは金色の石像の不動尊出現なる
僧正これを祈念し石尊と作り社を建て安し又槻木を以て一躰の
尊容を作り今の本堂奥に不動明王これなり此山峯高くして清泉なし
一の流となりしゆへと祈りしゆへは嵓頭より一流の飛泉滔々として落たり
今の二重の瀧これなり即青龍権現と祀て祠を傍に建ゆへ當山開闢の霊
應は　帝に奏しゆへを叡感斜ならは總房相三ヶ國の中にて寺高を
若干宛行ひ玉ひて其綸旨を賜へ其より伽藍壮麗にして四十九院の坊
舎に香煙の匂ひ芬々たり益々天下の祈禱として僧正明王の尊前に三七

日六波羅蜜を修しゆへを満願の日明王一偈を示して曰

當来導師慈氏尊　法華尓生名良辨
我山建立作佛事　未法衆生施安樂
此地清浄為結界　迷多衆生不来住
東南西限十八町　我形像作為本尊
是山五佛表形像　五大明王當守護
一度参詣得壽福　家内安穏無諸病

當山金堂の乾の谷に大なる池あり此池にて良辨一七日加持しゆへは池中より
大蛇現してこれは此山の守護者也年久しく荒神と成て五濁の塵に交
り法性の曉を見ざる也へ蛇身となる今僧正の法施によりて都率内院に生
る此後當山に跡を垂て永守護神と成て法を魔障する者は悉しと
云終て見へず　以上當山寺記の大意なり　扨此山を相州第一の高嶺にして常に雨氣
絶る故に雨降と山鳴とせり山麓より頂嶺まで嶮々として坂路く巌と
双へし隠々として左右に民家相連り其中に當山の御師の家多し諸國に
檀那を持て家々神札を配るいはしへを祭る修験者のよし聞ゆ山奥の石尊
神を阪徑崔嵬として雲に連り霞に封ぬ毎歳六月廿七日より七月十七日

眺望は開けば江府の諸人稲麻のごとく近國近郷の登山竹葦に似たり
旅舎は所せくまで立並み合山野の茶店は其地の産物をおして小田原の
方よりの諸人を飯住の観音に参りて坂東五番の札所を拝ミ蓑毛より
登りて大日堂蓑毛不動は拝ミ明王へむかし　應神帝の御宇初て漢土
より渡らせ給ふによりて日本最初の霊尊と崇む原大山の名をもて神号
大山祇命は古くは山の名に傚ふとかや京師の愛宕山和州の金峯山なと
比して絶峯を乾坤を離れ天地の外に出るがごとく真に捨芥抄に見
えたる七高山の外にして八極は観霊嶽形るか
漆屋時忠は近州志賀といひ又相州由井里といへ来争一勘あり時忠は藤原氏
にして俊海公の後裔之因是近江に鎮地あり　又相州へ住國なく住居せり
故に近州といひ相州と
いふも此旨趣なるべし

東海道名所圖會巻之五畢

国立公文書館
National Archives of Japan